『齋庭に之の祕事を傳ふ』

祭事とは、○と○とが一つに成ると云ふことである。「まつり」の「ま」は、「莫囂圓隣」の「ま」で、「成り成りて成り餘れる」「ま」で、「成り成りて成り合はざる」「ま」で、箇體成立の原型である。其の「ま」を種子として、此の「ま」を外廓として、一世界を築くのが「まつり」である。「つ」は出づるので、「り」は上の音に從ひて、其の音義を强むると共に、確實性を示すので、慥に其の通りであると云ひ据ゑたるもので、○と○とが抱合合躰して、神國樂園を築き成したとの意である。

「かみまつるまつり」とは、神を仰ぎまつりて、神の國を築き成すとの義で、それは、「ひめかみわざ」である。人類が、「みそぎ」と傳承し來りし祕儀密言で、必竟、「死生觀」と呼ぶに等しいのである。

「みそぎ」が、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の教へ給ふところであることを、前に述べたが、神代紀は、皆悉、「みそぎ」の事理を傳へたので、假に、古事記の上卷だけで、其の例證を擧ぐるとすれば、

第一が、天地初發。

第二が、萠騰而成神。

第三、國常立神。

第四、修理固成、天沼矛。

第五、陰陽合體。

第六、悔改。

第七、國嶋產出。

第八、生神。（マタカミヲモウミタマフ）

第九、豫母都志許賣。（ヨモツシコメ）

第十、竺紫日向之橘小門之阿波岐原。（ツクシノヒムガノクチバナノヲドノアハギハラ）

第十一、天之眞名井。（アマノマナキ）

第十二、天石屋戸開。（アマノイハヤドヒラキマツル）

第十三、櫛名田比賣。（クシイナダヒメ）

第十四、都牟刈之大刀。（ツムガリノタチ）

第十五、大國主神。（オホクニヌシノカミ）

第十六、須勢理毘賣。（スセリビメ）

第十七、八上比賣。（ヤカミヒメ）

第十八、沼河比賣。（ヌナカハヒメ）

第十九、天之羅摩船。（アマノカガミノフネ）

第二十、御諸山上神。（ミモロヤマノカミ）

第二十一、天忍穗耳命。（アメノオシホミミノミコト）

第二十二、木花之佐久夜毘賣。（コノハナサクヤビメ）

第二十三、鹽椎神。（シホツチノオヂ）

等である。

第一の、「天地初發」は、⊙神御生誕の祕事で、天成り、地定りたる曉である。天地と別け給へる神事が、「みそぎ」なので、其の結果は、天御中主神・高御產巢日神・神產巢日神の三柱神生れさせ給へるものである。

第二の、「萠騰而成神」は、「久羅下那洲多陀用幣琉」物を資料として、それを整理したる結果、「宇麻志阿斯訶備比古遲神・天常立神」の成りませるにて、資料を整理して、神界樂土を築成するは、「みそぎ」の神事である。

第三、「國常立神」とは、天成り、地定り、神聖其の中に生れさせ給ふので、亦名を、豐雲野神とも白し、其の次次に生れませる十柱神は、表面から云へば、國常立神の神德で、裏面から察れば、國の內容で、表裏を合せ觀れば、十柱で一柱で、饒速日尊の十種神寶が、十種で一種であるのと同一で、數として見れば、十なる一で、それは、そのまま、一なる零で、〇神と稱へまつる天祖で、∞としては、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神なのである。

之を、「神世七代」と白しまつるのは、七の數理から名づけたので、零なる一の妙用は、怪奇異靈で、神で、魔で、神魔で、變幻出沒して、窺ひ知ることが出來ぬ。唯唯、神の宇氣毘を畏みて、專念一意、信仰ぎまつるべきであるとの義である。之は、別天神の神德で、人間世界のみの事理で推測しようとすると解らなくなる。人は、自己が箇體として活動して居るから、それに制せられて、箇體を解いた零を悟證ることがなかなかむづかしい。之を悟證れば、天成り地定まるもので、其の曉には、「神聖國常立の生れさせ給ふ」ので、それは、「みそぎ」の結果で、日本紀と舊事紀との卷頭には、此のことが委しく記されてある。

第四、「修理固成、天沼矛」とは、「天沼矛の神事」とも稱へまつるので、日本天皇治國の大道にてあらせらる

ることと拜承しまつる。古事記の本文は、不幸にして、神傳を撰錄採摭された爲に、人間的作意が混淆(マジッ)て、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神(ナギイザナミフタハシラノカミ)が、陰陽の兩儀と稱へまつらるる意味にての太極なる⊙(ヒノカミ)で、卽、㊥にてあらせらるることを曖昧にされたのは、何如にも殘念である。

どうも、古今の學者が、學に迷ひ、學に溺れて、事理を誤つた憾が多い。太安萬侶の如き、當代隨一の大學者であつたらうと思はるる人も、また其の一例である。「乾坤初分、參神作(シ)造化之首(ヲ)」と、上表文に記したのに始まつて、「次ぎに、次ぎに」と、神代の神の出生(ウマ)れたかの如く書き綴つて居る。それも、始無く、終無き中の始であり終であることを明にするならば可いが、此の點が全く分つて居らぬ爲に、神代紀が、人間的神話と成つたので、讀む人に、「かみ」の實在を明確に把握さすことの出來なくされたのは、遺憾至極である。

「修理固成、天沼矛」とは、本來本有の神德と稱すべきで、資料を整理して、完全圓滿の箇體を築き成すべき、用と體とに名づけられたので、資料整理の爲に、分解作用を司るのが「修理」で、「すり」と讀む。之は、神代の言靈である。「固成」は、「かためなす」で、造り上げるので、總合し統一するので、「天沼矛」は、修理固成の妙用を發揮するの主體で、其の內容は、○(ソロヒテ)∞(ナラベテ)◎(イモリ)◎(サラニ)◎(クネ)⊘(チラサズ)⊛(イリヒ)・(オサメテ)◎(ココロ)◎(シツメテ)で、如此にして、修理固成の神業を完全に成し遂げらるるのである。それで、「天沼矛」と白しまつるは、祓禊の神器としての主神にてましまし、「修理固成」と詔りますは、祓禊の言靈としての司神にてまします。言(コトバ)も、相(スガタ)も、神代(カミノヨ)に在りては、總べて「かみ」にてあらせらるることは、繰り返して述べたので、神器としての「天沼矛」も、詔としての「修理固成」も、共に等しく神代の神であるが、此のことを、慥に體得するならば、神代卷(カミヨノフミ)は、自(オノヅカラ)、解き得るのである。之を開くの鍵は唯一つの⊙(ヒ)である。唯一つではあるが、其の光は、重重無盡であるから、之を仰

ぎて、目眩み、耳聾するが如くにして、誤つて異端邪說の鬼窟に陷ることが多い。學者の特に留意せねばならぬところである。

第五、「陰陽合躰」。先師の傳へた神事に、一つの印相が有る。それを、「天沼矛」だと敎へられた。此の「天沼矛」を以つて、大虛空を兩斷すると共に、大音聲を發する。此の音聲が、一線の光明と成つて、宇宙を貫き徹す。之は、氣吹戸主の神事で、妖魔調伏の祕事である。此の一線の光明を發する主體は、我であるが、我の內に結ばれたる陰と陽との兩極が、其の活用を現はすので、此の神事の印相は、「天御柱・國御柱」を象徵したものである。合せては、「心之御柱」と稱へまつりて、⊙神の御座にてましますのである。

古事記だけでは、此のことが明瞭でないが、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が、淤能碁呂嶋に、天沼矛を指し立てて、國の中の天御柱となされた」と、舊事紀に載せてあるので、古事記の本文を補ふことが出來る。之は、此の圖のとほり、◎である。其の、國と云へるは外廓で、○であり、天御柱とは、中心の一點であると共に、國を統率したるものであるから、◎が卽、天御柱だと云ふことになる。すると、之は同時に、國御柱である。國御柱で、天御柱で、心之御柱であるものが、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神である。之を、「陰陽」と稱へまつりて、二柱の一柱で、極小としても、極大としても、共に、陰陽である。それは、陰と陽との二つであつて、そのままに、一つなのである。

物と云ふ物を、何のやうに分割しても、陰と陽との合体なので、又、何如に累積しても、陰と陽との合体である。之を、◎と稱へ、日神と白しまつるのである。幾度となく繰返して述べたやうに、日とは、二つの光で、⊖である。⊖と呼ぶところの◎が、神人產出の胎であることは、「天成り、地定りて、高天原が出來た。高天原が出

來たので、神が産れた」と、古典にあるので判明る。それで、此の「天御柱・國御柱」を、化竪給ふは、祓禊の神事である。「化竪」の字を用ゐたのは、舊事紀であり、日本紀であるが、能く義理を傳へて居る。古事記のやうに、「見立」では、一寸、品物扱ひにされた感じがする。

第六、「悔改」は、◎の神事と稱するので、經津魂の妙用で、布留倍の祕事で、經津主の祓で、經津主命の別名と傳へられたる齋大人の禊である。之に依つて、祓と云ひ、禊と呼ぶ神事は、相互に表裏を成しつつ、人天萬類を化育長養するの義であることを知らるるのである。

「二柱の神が、相互に約り竟へて、天御柱を廻りし時、伊邪那美命が、先に詞を挂けられたので、伊邪那岐命が、女人先言不良と詔せられた。けれども、そのままにして、お生みになられた御子は、良くなかつた。で、之を悔いて、共に、天神の御所に參り上り、天神の命を請ひまつる時に、天神の命に依りて、布斗麻邇爾ト相た。其の卜相は、女先言不良との詔せである。依つて改めて、詔せの如くに、陰陽の位を正しくして、茲に、大八洲國が完成されたのである」

顧みよ。省みよ。汝の何物なるかを反省みよ。其處に道有り。其處に光有り。「光は神なりき」。其處に詞有り。「詞は神なりき」。之を「初發」と呼ぶ。

人天萬類が、天地と剖割き、陰陽と分別ち、神魔を審判して、一圓光明の⊙國を築くは、祓禊の神事の他には無いのである。

第七、「國嶋産出」とは、天成り、地定りたる曉なので、祓禊の結果として、一圓光明の大虚空を仰ぎたる時、それは、◎であるから、太極とも呼び、小極とも云ひ、兩儀とも、陰陽とも、神とも、魔とも、空とも、實と

も、火とも、水とも、ヱホバとも、マヤとも、マリヤとも、アバイロンとも、ヤーマとも、母とも、父とも、天とも、地とも、無とも、有とも、無一物とも、物とも、理とも、點とも、線とも、面とも、零とも、一とも、二とも、三とも、五とも、十とも稱するので、一であるところの一切で、物無きの境地である。物は無いが、境地としての零界を保有するのである。で、之は、無の有と呼びて、位置のみ存るのである。

位置のみだと云ふのは、未、物を成さざるので、物と成るべき資料の存るのみである。其の資料に依つて、箇體を築くには、其の種子が無ければならぬ。其の種子を「し」と呼ぶのである。「し」とは、死であり、知であり、治であり、主であり、人であり、統治で、統率で、我である。此の種子は、其の初、唯一點としての位置を占めただけであるから、未、量に上らないのであるが、其の種子の萠騰出づる時、葦牙の如くであるとて、之を、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へて、「ほ」と呼ぶのである。訶備とは、穎の複數語で、萠えに萠えたる穂で、△である。△と圖示するのは、箇體發生の上から、等しく、箇體たる人類の便宜なので、⊙と畫くに等しいのである。故に、之を擴大し、說明を加へて、◈と描くも、※とするも、或は、⊛、又は、◎、又或は、❁と描きまつるも、共に等しく、・を種子とし、△を原型とし、⊙を標識基準として、生れ出でたる相である。之を言ひ換へると、死と呼ぶところの零から、其の零を資料として、此の生を生ずるので、之を「しほ」と稱し、鹽とも、潮とも、汐とも書き、此の妙用を主る主體を鹽椎神と稱へまつり、其の創造せらるる狀態を形容しては、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へ、內容を解說しては、「二柱祖神」「修理固成天沼矛」「天浮橋」「鹽固袁呂固袁呂」「淤能碁呂嶋」「天御柱」「八尋殿」「美斗能麻具波比」「布斗麻邇」「大八嶋國」と傳へたのである。

それは、大虛空に、一點を認めたる時、其の一點が、旋廻し統一して、箇體たる宇宙を築く。其の旋廻し統一

して、築き成したる宇宙は、布斗麻邇と稱する一圓相を標識基準として、不斷の活動を爲すので、事業としては、直毘大直毘神の稜威を仰ぎて、失墜することなく、國土としての高天原を築き成せよとの、神の代の神の御教と拜承しまつるのである。

「しほ」の內容として、此こに擧げた古典の詞は、神の詞であるから、そのまま、神であつて、また、その神德の妙用を教へられたのである。が、之が委しき說明は、「言靈祕說」を待つことにしよう。

第八、「生神」とは、別天神たる隱身の獨神が、八百萬の神を生み給ふので、「惠保婆の神は、宇宙の外に在りて、宇宙を造り給ふ」と云へるもので、「神の獨子たる基督を降し給ふ」と稱するもので、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神は、別天神たる獨神の陰陽で、それが、國嶋をも、國嶋を統治す主宰者をも、生み給ふので、二柱神の共に生みませる嶋は、十四嶋で、神は、三十五神で、天地と剖割きたる時、國嶋としては、高天原たる境地で、神としては、高天原統治の日神で、天照大御神と稱へまつりて、三十五神にてましますので、その三十五神とは、波留比比咩と稱へまつる☉で、我期大君にてましますので、國家としては、天皇と稱へまつり、人天萬類としては、直日と謂しまつり、大虛空としては、二柱祖神と仰ぎまつるのである。此の二柱祖神と稱へまつるは、生神の妙用で、祓禊と白しまつるのである。

第九、「豫母都志許賣」は、如何にして生れたのか。日本紀には、泉津醜女と書き、極端に醜惡なる女と解釋してある。「伊邪那美命の命せをよそにして、伊邪那岐命の投げ棄てられた黑御鬘の蒲子を撫ひ食ひ、筍を拔き食ひなどした」とは記載して居るが、それだけでは、其の本質を明瞭にすることが出來ぬ。

「愛しき我が那邇妹としての伊邪那美命を、一火にて見給へば、宇士多加禮斗呂呂岐て、何に例へやうもなく

醜悪なる御體なのに驚き給ひて、伊邪那岐命は逃還られた」とある。

「伊邪那岐」とは、陽で、積極で、進で、取るで、勝つのであり、「伊邪那美」とは、陰で、消極で、退で、逃避で、亡命である。別の方面から、此の二語を解釋すれば、神と魔と、美と醜と、正と邪と、善と悪と、或は、天地、明闇、高低、大小、長短、賢愚、利鈍、貴賤、貧富、等と稱すべきで、活用としては、破壊と建設と呼ぶところの「修理固成」である。「一句之中、音訓を交へ用ゆ」と、古事記の上表文に記されてあるところの一例が、此の四字で、「修理」を「すり」に當て、「固成」を、「固め成す」と訓ませたものである。

之を斷言する所以は、此の神勅が、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神に詔せて言依さし賜ひし」ところであるから、陰と陽との、體なり用なりでなければならぬことが明瞭な爲である。

その「修理」とは、破壊で、火神の活用で、御母命をも、炙き殺し給へるものである。「すり」の音義は、藥、鑪、等の「すり」と等しく、其の「す」は、酢、進、鋭、等の「す」で、又、接頭語としての「す」で、表から見れば、鋭利の義で、裏には、敏活の意を潜めて居る。「り」は、上の音義を強むると共に、神代の言としての「りむさく」の義で、「すり」と合せては、調伏、濟度、救出で、改造の意を含んで居る。其の用を、「火神の母命 伊邪那美神は、八種雷を初め、黄泉魔境の主として、國の人草を、一日一日に、千頭づつ絞り殺す」と記されてある。

之は、破壊であるが、單なる破壊ではない。「僕は妣國根之堅洲國に罷らんと欲ふが故に哭くのである」と、建速須佐之男命の御言に依り、伊邪那美命の國は、根堅洲國とも呼ばるるので、其處には、「葦原色許男が、須勢理毘賣を負ひ、生大刀と生弓矢、また、天詔琴を取りて、逃げ出したる時、建速須佐之男命が、黄泉比良坂ま

で追ひ來りて、汝の持ちたる生大刀と、生弓矢とで、國土を平定して、大國主神と成れよと謂された」とあるから、大國主として、國土を平定し統一し統治すべき武器と、智慧、財寶、等とを所藏し居ることが明瞭である。

さうして、「大國主と成るのに、根堅洲國に入りて、第一の寶たる須勢理毘賣を得、蛇の比禮、吳公の比禮、蜂の比禮を得、鼠の言を聞き、火を遁れ、須佐之男命の心を和げ、天詔琴と、生大刀と、生弓矢とを得た」のは、人間世界を統治すべき資格を完備すべく、黃泉魔境を巡り回りて、火神の祓を仰ぎ得たことを教へて居る。

「御祖命（ミオヤノミコト）が、子（ミコ）大穴牟遲神に、須佐能男命の坐します根堅洲國に行かれよ。さうしたならば、必、須佐能男大神が、教へ給ふであらうと云（マヲ）された」ので、伊邪那美命は、表に破壞を主とし、裏には、建設を計らせ給ひつつ、過今來を一貫して、天沼矛の神業を執り行はせらるることと拜察し奉るのである。

そこで、朝廷大祓の御言に、「祓給ふ事を、大海原に持ち出で、鹽の八百會に可可呑み、氣吹戸より氣吹放ち、根國底國にて、持ち佐須良比失ひ給ふ」と宣らせらるるは、畏くも、道反大神（チカヘシノオホミカミ）の神事にましまして、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の、神議り議り給ふ祕事で、祓禊（ミソギ）と稱へ奉るのであるが、半面だけを見れば、幽（ウラ）事は、「祓（ハラヘ）」で、伊邪那美命を主神と仰ぎ、建速須佐之男命を司神と仰ぎ、瀨織津比咩神、速開都比咩神、氣吹戸主神、速佐須良比咩神を、分掌神と仰ぎ、速玉男神、泉津事解之男神（ヨモツコトサカノヲノカミ）を、應化神と仰ぎまつるのである。顯業（オモテ）は、「禊（ミソギ）」で、伊邪那岐神を主神と仰ぎ、天照大御神を司神と仰ぎ、神直毘神、大直毘神、伊豆能賣神、底津綿津見神、底筒之男命、中津綿津見神、中筒之男命、上津綿津見神、上筒之男命を、分掌神と仰ぎ、大禍津日神、八十禍津日神を、應化神と仰ぎまつるのである。

此の幽（ウラ）事と、顯業（オモテ）とを合せて、「御身之禊（オホミマノハラヘ）」と稱へまつるは、日神事（ヒノカミワザ）であり、火神事（ヒノカミノカミワザ）であり、水神事（ミヅノカミノカミワザ）

である。之を圖示すれば、△▼▲なので、陰が陽を覆ふものであり、陰裡に陽芽を孕めるものであつて、古老が、「あきはぎ」と教へたところの、「含牙」である。▲中の△は、「一火」で、その▲は、罔象女で、「闇黒の土」で、黄泉國で、伊邪那美神で、宇士多加禮斗呂呂岐たる八種雷で、豫母都志許賣である。

斯くて、豫母都志許賣の禊は、日本天皇の朝廷に於かせられて、年年、夏冬の二回は、特に全國に令して、行はせらるると共に、齋廷最祕の嚴儀なることを拜みまつらるるのである。阿那畏。之是、神界魔境一貫之祕事。珍重、珍重。人天萬類面伏。仰ぎ見ることを得ざるところ。

伏して惟るに、豫母都志許賣は、妖魔群團身にして、八雷神を孕み、八十禍津日神を生み、大禍津日神を養ひ育て、修理固成の神業として、神國を築き成すなる天沼矛の神儀尊容にてましますなることを。

第十、「竺紫日向之橘小門之阿波岐原」とは、神代の神の神宮との義で、神界の祕言である。それを、人間世界に天降り來れる後にも、追憶の念止め難く、地上世界の國都に命名して、偲び來つたのである。宛も、高天原が、大平等海虚空藏の義としての「オホミソラ」であるのを、人類天降の後には、皇孫統率の「美頭乃御舍」を讃へ奉る詞として用ゐられたのと同樣なのである。

神言靈は、一意專念、唯是、讃仰し奉稱しまつるべきで、本來は、分析し解說すべきではないが、不幸にして、今人は、徒に疑ひ深く、漫に分解解剖の癖のみ强いので、神の祕事さへも、說明し講釋せねばならぬやうな不祥事が起つて來た。まことに、何とも、恐懼に堪へない。

既に述べたる如く、天沼矛とは、修理固成で、修理固成とは、破壞と創造とで、破壞とは、殺で死で、創造とは、活で生である。隨つて、祓とは、死であり、禊とは、生であり、祓禊とは、死生で、禊祓とは、生死で、之

を都べては、「マツリ」と呼ぶのである。ところが、人人は、生を求めて死を避けようとし、活きんことは願へども、死ぬことは嫌ふ。そこで、「マツリ」と云ふ言靈にも、祭祀なる文字を充當てて、尸祝と書くことを避けて來たのである。尸祝は、「ハフリ」であるが、それは、葬送・招魂・復活・の神儀で、魂齋の祕儀で、天鈿女の祕事で、死生解脱・天界築成との義であるから、「マツリ」と同義である。

「ハフリ殿」と稱へまつるは、此のやうな祕儀密事の行ぜらるる鎭魂殿なりとの義で、天皇治國の原泉たる八神殿の亦の御名として、「別に一座を設け給ふ大直日神殿」なりと拜承しまつるので、八心思兼神の神儀尊容と仰ぎまつらるるのである。

古典には、「高御產巢日神の御子、思兼神に思はしめて、天窟戸を開きまつる計りごとを立てさせられた」か、「高御產巢日神・天照大御神の命せにて、八百萬神を集め、思金神に思はしめて、葦原中國を平定すべき適任者を定められた」とか、「思兼神と、八百萬神とが相議り」とか、また、其の「神議を繰返し繰返した」とか、「日子番能邇邇藝命に、五伴緒を支り加へ、それに、常世の思金神をも副へ賜ふ」とか、「思金神は、み前の事を取り持ちて、爲政者たれ」とか傳へてある。で、此の思兼神とは、現今の詞で云ふならば、「參謀總長宮殿下」であらうか。內閣總理大臣とか、內大臣とか云ふのではない。さうして、「宮殿下」であらせられるので、それも「御直の宮殿下」でなければなるまい。が、兎に角、神代紀は、現在の人間社會とは、また甚、その趣を異にして居るから、完全には當て篏らないのである。それは、人間未聞かず、未見ず、未知らざる「久士布流多氣（クシフルタケ）」の祕事であるからである。

奇靈神異の火の海を、神代の神は、久士布流多氣と命けて、零なる一と教へ來つたのである。古典は、之を記

すこと懇切丁寧であるにもかかはらず、此の祕事を、祕事なるが故に、未聞かずと云ひ、未見ずと思ひ、未知らずと稱す。

可憐憫哉。人間身心者、雜糅混淆之、
妖魔群團也。此故。住於零界而、
不識於零火。在於火中而、不見於火人。
百千萬年、令繫于獄裡。紛紛擾擾、
喧喧囂囂、而遂、不能解脱鐵鎖、
不知奉拜天日也。噫。可悲哉。

於此か。伊邪那岐大御神には、「一つ火」を掲げて、獄裡魔界の祕を發かせ給ふ。

此の火。

此の火とは、全世界人類が、太古以來忘れんとして忘るること能はず、知らざらんとするも、思ひ出さしめられつつ、各國各地に、各人種各民族が、我ともあらで、語り傳へ、描き傳へ、記し遺して、今に到れる神祕である。

察よ。此の火。

これは是、地獄の火。六道の火。黄泉魔境の火。而して是、天界の日。神域の炎。而して又是、天界地底踏破卓立の神魔。三にして二。二にして一。一にして四。四にして六。六にして零。之を、燃ゆる火と呼び、光る日と稱へて、三不可分の零であるから、そのままに一なりと稱す。一とは「カミ」であるから、また二である。

燃火物取而裏而福路庭入登不言八智雲無爾。向南山陣雲之青雲之星離去月毛離而。

と傳へたる火で、月で、星で、それは、天魔地妖でもあり、亡魂幽靈でもあり、亦の名は、軻遇突智で、火產靈で、火神で、八人の泉津醜女で、泉津日狹女で、山祇でもあり、海神でもあり、八色雷公であつて、伊邪那美命にてましますのである。一つ火に照らし出されて、宇士多加禮斗呂呂岐たる物は、本來、其の火其の物であるから、又是、伊邪那岐命にてましますのである。

聖にあらざれば、聖を知らず。魔にあらざれば、魔を知らず。善惡邪正是非曲直を辨ずるは、之を辨別する權衡を有するが爲であることは固よりで、取り立てて說明するまでもない。さうして、其の權衡とは、善惡邪正是非曲直其のものであつて、又之を出すの火である。「櫛の雄柱一つ」の火である。此の火の前には、妖魔も隱る術を失ひ、隱德も顯彰せられざるを得ない。魔界も神國も、昭昭と照らし出さるるのである。之を「久志布流多氣の祕事」と傳へたのは、人を敎へんが爲に、「火山」を指示したので、火を噴き水を呼ぶの祕を怖れ畏みては、「神吾田鹿葦津比賣」と稱へ、「奇哉振魂尊」と仰いだので、天津日子日子番能邇邇藝尊の御神德は、實に奇靈神祕、振魂尊にてましますなる哉。天照す日の御子にてましますなる哉。天照大御神にてましますなる哉。此の火に祓ひ、此の海に禊し、此の中瀨に降り迦豆伎給ふ。此の中瀨の禊。之を別の詞で云ふならば、竺紫日向之橘小門之阿波岐原としての高天原たる國都建設の神業となすのである。

此の「中瀨」に到るべく、此の「神國」を築成すべく、「衝立船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神」を「脫却し給へる」御玉體は、唯一無比、超絕零體、非神非魔。一切を脫却して、一切を攝理し給ふ。そこで、八十禍津日神・大禍津日神。神直毘神・大直毘神・伊豆能賣神。底津綿津見神・底筒之男命・中津綿津見神・中

筒之男命・上津綿津見神・上筒之男命。天照大御神・月讀命・建速須佐之男命。十四柱神は、生れさせ給ふ。その生れさせ給ふとは、伊邪那岐大御神の「御身之禊（オホミマノハラヘ）」であつて、神國樂園の築き成された曉である。その十四柱神と稱へまつるは、そのまま、伊邪那岐大御神と稱へまつる三柱の貴子にてましますなれば、天津日子日子番能邇邇藝尊と仰ぎまつる天皇にてあらせらるるのである。

畏矣（アナカシコ）。

「仰ぎて見れば、天津日は、二つはあらず。人の世の、大天皇（スメラミコト）は、一柱」とは、竺紫日向之橘小門之阿波岐原の禊の約言だと云ふことが出來よう。

天津日は二つはあらず。根本中心たる直日は、唯一不二である。唯一であるから、重重無盡又無量である。此のままに、無量無限であるから、各自各自が各自各自に、其の所有せる根本直日を明め得ない。全人類統率の大天皇を拜みまつることを知らない。まことに憐むべく悲しむべきの極みである。覺めよ。醒めよ。覺醒（サ）め來つて、此の火を仰げ。此の日を讃へよ。其處は大平等海にして、一碧瑠璃の光明世界で、平和嘉悅の高天原で、豐葦原の水穗國で、全人類世界此のままの樂園で、天國で、極樂淨土とも呼ぶのである。

第十一の、「天之眞名井」とは、宇氣比と云ふに等しい。

宇氣比とは、「汗氣（ウケ）伏せて、踏み登杼呂許志」たるもので、「汝が心の清明（アカ）きこと」を知るもので、「天安河を中に置きて、十拳劔を、三段に打折る」ものである。

さうして、「物實（モノザネ）を、天之眞名井（アマノマナキ）に振滌ぐ」ものは、天安河の禊で、天照大御神の祕事としての、御子生みなる「氣吹の狹霧」である。其の氣吹の狹霧とは、◎と畫きて、水火既濟と支那人の稱する「ミヅホ」で、䷾と

畫くのは、陰陽和合で、地天泰平なので、和魂（ニギミタマ）たる大平等海裡に、直毘（ナホビ）としての火を孕めるもので、古言に、「フフム」と傳へたるところ、「フフム」とは、祓禊の義であると共に、その結果でもある。祓言としての「フ」と、「フ」とを重ねて、それを結ぶに、「ム」の音を以つてして一語を成したので、生産の義で、産靈で、産魂で、産靈産魂である。その産靈産魂結び止めたる玉緒を、「ミヅホ」と呼ぶ。

玉の緒を、結び結びて、人の身は、伊着くなるなる、天安河。

「タマノヲ」とは、「五伴緒」で、「八十神」で、「八上比賣」で、神としては、「八神」で、人としては、「八千魂」で、「八十萬魂」で、物としては、分分個個で、天上にては、群星で、地下にては、妖類魔族で、分散しては、邪惡醜陋で、死と呼ばれ、統一しては、善美正誠で、生と云はるるのである。

ところが、人は生を喜び、死を惡む癖が有るので、「タマノヲ」をも、「命（イノテ）」と呼びて、生けるものとか、生くべきものとかの義に用ゐ來つた。けれども、「タマノヲ」も、「イノチ」も、本來は生死を通じて、千變萬化する靈魂（クシビ）なりとの義で、「ヒ」を活用の方面から觀て名づけたのである。それで、それがまた直に、燃ゆるものであり、流るるものであり、上るものであり、下るものであり、暖きものであり、冷きものであり、尊きものであり、卑きものであり、天で、地で、陰で、陽で、死で、生で、水火である。それで、「ミヅホ」と呼ぶのである。

「ミヅホ」の「ミヅ」は、水（ミツ）で、滋潤（ミツ）で、稜威（ミツ）で、瑞祥（ミツ）であつて、經（クテ）と緯（ヌキ）とで、十（トヲ）である。その「ホ」とは、火（ホ）で、穂（ホ）で、秀（ホ）で、高く明に顯れたるものである。此の二語を合せたる「ミヅホ」とは、奇靈異變の實體であり、妙用であるとの義で、それをまた、稱詞として「水穂國（ミヅホノクニ）」と用ゐては、萬物備はりて、瑞祥到り、稜威赫灼として、百姓潤澤なるもので、太平嘉悅の神國樂園なりとの義である。

此の神國樂園を築くべく、物實（モノザネ）たる資料としての一切合切を、天之眞名井に振滌ぐと云ふのは、資料を整理するもので、神としての上では、「八十伴緒を統ぶるもので、五伴緒を率ゐるもので、八十神を打平ぐるもので、上比賣を得給ふもので、大直日神が、八神の亦の御名にてまします」ので、人としてならば、八千魂を統一するものである。八千魂の統一したる曉には、人の心身（ミ）ながらの神なので、之を說明的に云へば十で、一二三四五七八九十であるが、其の實相は、一なる零である。

此の零が、天之眞名井なので、白玉光底に潺湲たるの泉である。古來、之を「本打切り末打斷ちたる天津金」と傳へたのは、太遞邇の祕言で、極を敎へたので、「與天壤無窮者」で、經としての時間を超えて居るから、としての空間を忘れて實在するもので、之が、人間世界に傳承したる「カミ」である。

ところが、人間身は、雜糅混淆なために、此の極を窮め得ないで、小我の見地に居て、神界を憶測するから、るで、トンチンカンな悲劇が演出される。

汗氣船（ウケフネ）を踏みとどろこし、天宇受賣、かみかかりすも。うつむろにして。

「ウツムロ」と古典に傳へたのは、神吾田鹿葦津比賣の宇氣比で、戸無き室と記して、零界虛空の義なること敎へてある。「虛空中にして御子の生れます」とあるものも、また固より此の零位なので、三產靈神座（ミムスビノカミクラ）である。三產靈神座は、零で、極で、一であるから、天之眞名井と稱へて、神代の神の神座である。此こに生れさせ給は、別天神で、隱身にてまします。

ところが、「天照大御神は、建速須佐之男命の物實を執らして、此の天之眞名井に振滌ぎ給ふのであるから、實を純一不可分の零に摧きて、更に吹き生し給ふの義で、其の吹き成し給ふは、「奴那登母母由良（ヌナトモモユラ）に振滌ぎて、

神國樂成の秘事（二）

佐賀美爾迦美（アガミニカミ）」給ふのである。

「ヌナトモモユラ」とは、「内は富良富良（ホラホラ）、外は須夫須夫（スブスブ）」と云へるもので、「妻須世理毘賣（ミメスセリビメ）」の教で、箇體成立の神業である。「サガミニカミ」は、噬み咬むので、作り成すものである。之を換言すれば、「ヌナトモモユラ、サガミニカミ」とは、修理固成の義で、天沼矛の神儀尊容で、「二柱神が、淤能碁呂嶋に天降りまして、天之御柱を見立て、八尋殿を見立て、其の妹に、汝が身は如何に成れると問ひ給へば、吾が身は、成り成りて成り合はざるところ一處在りとまをしたまひ、伊邪那岐命の御身は、成り成りて成り餘れる處一處在りと詔りたまひ、成り餘れる處を以て、成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土（クニ）を生み成さん」と、相互に契りて、身と言と意との統一するにあらざれば、神界を築き得ざるものなることを垂示したまへるもので、「成り合はざる處」とは、女（メ）で、凹（メ）で、陰（メ）で、□（フ）と描くので、數としての二であると共に五で、それは緯（ヌキ）である。「成り餘れる處」とは、男（ヲ）で、陽（ヲ）で、凵（ヒ）と描くので、數としての一であると共に六で、之は經（タテ）である。

緯（ヌキ）なる女（ノ）とは、滋潤（ミツ）であり、水（ミツ）であつて、罔象女（スガタハナキナリ）と傳へたる水神（ミツハノメ）である。之を二だとは、成り合はざるが故であり、また之を五だとは、成り成りて子女を產出するの母胎であるからなのである。經なる男（ヲ）とは、稜威（ミツ）で、火で、「迦具土神（カグツチノカミ）」で、地界の主神である。そこで、之は、男（ヲ）としての一（ヒ）で、母たる二に對しては六である。六と云ふのは「ム」で、結びたるもので、五なる成數より產出せられたる一で、之を六なる一と說明するのである。之が、天地否塞の祕數である上からは、また、零なのである。

それは兎に角として、此の經と、其の緯との相交りたるものが、國土（クニ）であり、人であり、天神で、地祇で、天地で、泰否で、神魔である。

経緯の別名　㊐引き頂より

／あらゆる「曾体」は必ず「経」と「緯」とから成る。

各々の別名は次のとおりである。

経……男（陽・雄・凸）、宇（時間）、「か」（天・乾）、父、一

緯……女（陰・雌・凹）、宙（空間）、「み」（地・坤）、母、二

／「大宇宙そのもの」や「零そのもの」は「曾体」ではない。

多数の「零」が集積して一定の内部構造を獲得した段階を称して「曾体」と云う。その構造は「中心と外郭」という形で捉えることもできるが、「経と緯」という形で捉えることもできる。あえて言うならば、後者は「曾体の成立過程」を理解するための考え方であり、前者は「曾体の完成形」を把握するための考え方である。

／また、神話では「経」のことを「成り余れる処」と、「緯」のことを「成り合わざる処」と表現している。その両者が合体して一個の「曾体」が成立したことを表現した図象が㊀である。

「ア」と「マ」と「アマ」

「ア」とは無くてあるもの

「アマ」とは「ア」としての妙用を現わしたる造物主の別名

ミタマの義

↓

「アマ」↑

「ア」↓造物主↓「アマ」↓

↓「マ」というミタマ↓

↓結び結びて神人一体となる

↓解くれば「○」と呼ばれる。

「アマ」とは「マ」と呼ぶミタマ

発き発きて涯無く限りのない火であるとの義

「マ」とは「アマ」と人の身として仰いだ状態で都べての物の標識基準である。

「マ」が結び結んで神人一体となり解くれば「○」と呼ばれる。

「マ」を形に書けば◎であるが

「○」の複合法であるから「○」でもある。

此の「マ」と語の「マ」との配合

合体により宇宙が成り立つ。

「発きては大宇大宙と成り結びては万類万物と成る」と「脩禊の辞」に書いた「大宇大宙」は人間常識の計量には上らないが、結び結びて万類万物と成るには、斯く成るべき種子が無ければならぬ。

「此の神事を神代の神は日本神道（ミソギ）と教へて神界現成の御行事なりと拝承す」

如是日本神道（ミソギ）とは抑〻奈何。

②

その種子を肉眼的に見ると、こんな象をして居る。それを日本民族は、「アマノミナカヌシノオホミカミ」の「マ」と学んで来たので、私どもは、それの継紹に因って「マ」の音を使用して居る。

大宇宙としては、客観的に唯「ア」と驚嘆するのみのその内容に立入れば、即、主観に入れば、拡張し発展して止まざる霊（クシ）なる魂（ビ）なることを観（シ）りて、「マ」と讃嘆さるるのである。

故に云、『「唯一つ」なるが故に「マ」と呼ぶ』のではなくて「その唯一つを摧破するとともに構成し構成するとともに摧破しつつ」窮ること無き・即、天壌無窮なるが故に、

「マ」とは呼ぶなりけり。

ああこれ、

日本神道極秘の神伝。

これを換言すれば、「破壊と創造との連鎖劇」を、神魔（カミ）なる日本国体となすなり。

日本国体、即、神魔、即、天皇、即、人、即、陰陽、即、天地、即、日本国体。

這箇神伝は天祖の垂訓にして、

不懦は、這箇（シャ）と呼べり。
○は日本語で「マ」と呼ぶ。
日本字でまた「マ」と書く。之レを、
支那風の楷書では「マ」と作る。
太陽の光を拝する時、是の如き象の合ひては別れ別れては合ひつつ万象を現ずるを、容易に認め得べきなり。
本来、此の現象世界の成立するは、完全なる○（スガタ）でないから起るので、若しもその完全なのが宇宙の「スガタ」であるならば、何の変化も活動も起り得ない。
これは何も理論がどうの斯うのと云ふのではなくて、宇宙の事実なので、実際なのだから、是（れ）を何う変更し見ようは無い。
天地、乾坤、陰陽、男女、雌雄、などの相対が、即、それなので、是レのない世界は無い。
けれども、
是レは私どもの常識である。常識たるに過ぎない。
なほまだ、
常識を超越したる
「大宇大宙」
「大平等海」と呼ぶべき
「タカマノハラ」がある。

アメユヅルヒ
クニユヅルヒ
の流行変転なるのみ。
また決して他奇有るにあらず。
一切の祭祀行事は悉皆此の事理に随ふ。

第十二問、

材木を用ゐて人が家を建てることは誰にでもわかります。けれども、「マ」と「マ」とが、いかに運動し作用すれば新しきものが創造されるのか、無形なるが故にその状態は皆目わかりません。大きく言へば、曰く天地の創造、万物の出生、善意、悪意の発生、色彩の不思議、等々。

□答、

然り。然り。
此の問や大に好し。
東西の古典、此の事理を伝へんとして古聖の心胆を砕けるを想ふ。
然れども、おそらくば、
日本古典の伝最詳密正確なるべし。
然れども、古典はその外観上よりは東西の各伝を対読せざるべからず。
内観としては神伝を会せざるべからず。

ミソギ神事の重要なることまたまことにここに存す。

『「マ」と「マ」がいかに運動し作用すれば新しきものが創造されるか』

その運動を伝へてまことに正確詳密なることまた日本神道の外にはあらざるべし。而して旧事紀の伝最判り易し。

此の「マ」とは○（カクノゴトク）

彼の「マ」とは○（カクノゴトク）なるがその一例なり。

此の「マ」は経に活動（ハタラ）き、

彼の「マ」は緯に動く。而して、

その活動状態の一例を示せば次の如くなり。

初に此のマは右旋しつつ

彼のマは左旋しつつ

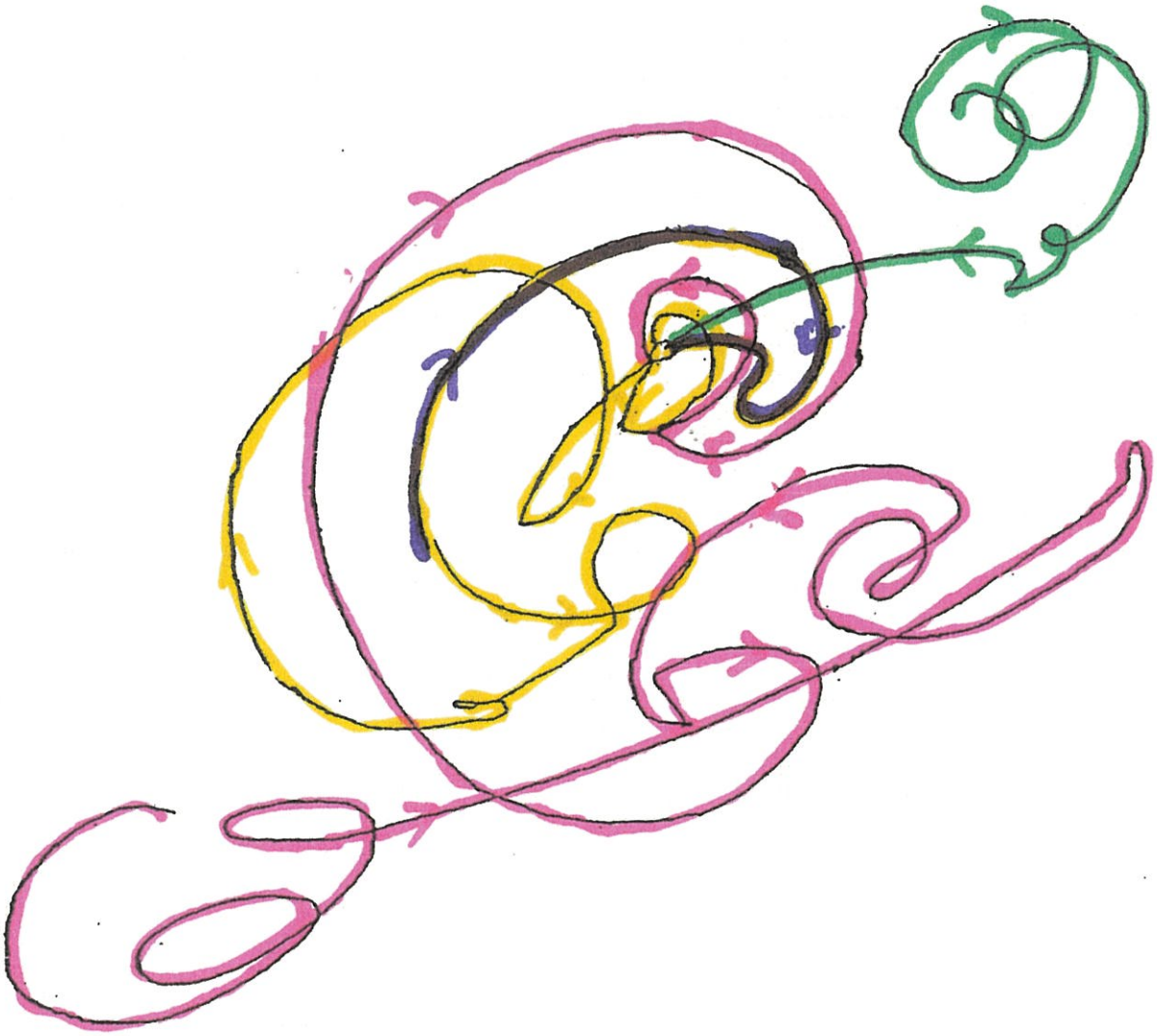
やがて　或位置に到り　その方向を転じて

此のマは左旋し

彼のマは右旋しつつ　或は交互に

左旋

右旋



変転しつつ　新なる一箇体成立す

「アチメ」とは、「アマノミナカヌシノオホミカミ」の妙境のこと

祭祀答問録(三)

多田雄三

問　祭祀の教は単なる倫理や道徳ではないと思はれます。そこには救済があり、久遠の生命があるものと考へます。

答　人の道は斯くあるべしと標識を立てたのが倫理であり道徳であるとすれば、それを超えて、つまり、時間と空間との限界を超越して、無始無終に無際限に流行流転換する神律に随順して行はれるのが「マツリ」である。故に、その行事は必や、久遠の生命に由るのであり、その結果は必や、彼岸に到達するのである。彼岸とは「タカマノハラ」で、それを圖(かた)に示せば○である。此の○は太平等海だから固より久遠である。生死を超えたる「イノチ」である。之レを「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

問　「原始反終」の語は祭祀を教へるものでありませうか。

答　之れは易經の語。始を原ね原ねて止まざれば、忽然として臍裡脚下に在り。出でては入り往きては返る。天津金木の太麻通たる○象を悟證すべきである。經も無く緯も無く、始もなく終もなき妙境である。「アチメ」と呼び、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

「ミソギ」が活物であれば祭祀も活物でありませう。若し然なりとすれば、活物なる所以、及、活動の状態。

答　此の「マ」と彼の「マ」とが抱合合体して新しき肇体を築く。それだから、祓禊と呼ぶも、祭祀と名づくるも共に等しく活物であり、それが直に活動の状態で、破壊しては建設し、建設しては破壊する。生まれては死に、死にてはまた生まれる。則、徹頭徹尾活動で、分秒の間と雖も止むことは無い。此の活動は、生死を超越して無始無終に無際限に活潑潑地に生死流転を展開して居る。然して、その到り着いたところは、大平等海なる「タカマノハラ」である。

古事記日本書紀等に傳へたる此の神言と詩篇の言とを總合し飜譯すれば次の如くなるべし。

日神の神功成て眺望たれば。海も海にはあらず山とても山にてはなし。我れに仇するものは自斃れ。我を虐げんと謀れるものは己が放てる矢にて胸をば射貫かれたり。見よ。ワギミの神 事の何如に威烈しかを。

語を換へて云へば。

日月昭昭不レ容二邪曲一。

天地默默嵩類著息。』

月明なる夜ではあるが、北方の山のあたりを眺むれば、紺青の色濃き中に、燦燦と星は光つて居る。ところが、不思議。我が靈魂鎭まるままに、我が幸魂躍るがままに、我が奇魂雄走るままに、我が眞魂の締り締りて我が和魂澄み清みたれば、星も無く、月も無く、山も、水も、將、大空さへも、唯一圓の光と化りて、それがのまま、森森羅羅、嵩象嵩物、出入往返。八百萬神は、歡喜勇躍。過去も、將來も、現在も、上も、下も、四八隅も、一切合切が、皆唯、一點より出で、一點に歸り、一點に繫がる。功罪賞罰、隱るるに處無く、遁るる途無し。奇なる哉。妙なる哉。此是死矣。又是矢矣。

古老は、之を讃嘆して、「阿知米」と稱へたのである。

昭和十九年四月十二日　東京都鷲宮祓禊所に在りて　多田雄三　山谷浮書

以上　第四章　終

死生觀の解說は、之で盡きて居る。けれども、本文は、なほ三分の二も殘る。今、それを、第五章に、

古老今人志不同

多田山谷

（一）

昭和十三年三月、平和郷に入り、安楽浄土の佛刹を築く。

其の状は方に似て然らず、圓に似て圓にあらず。

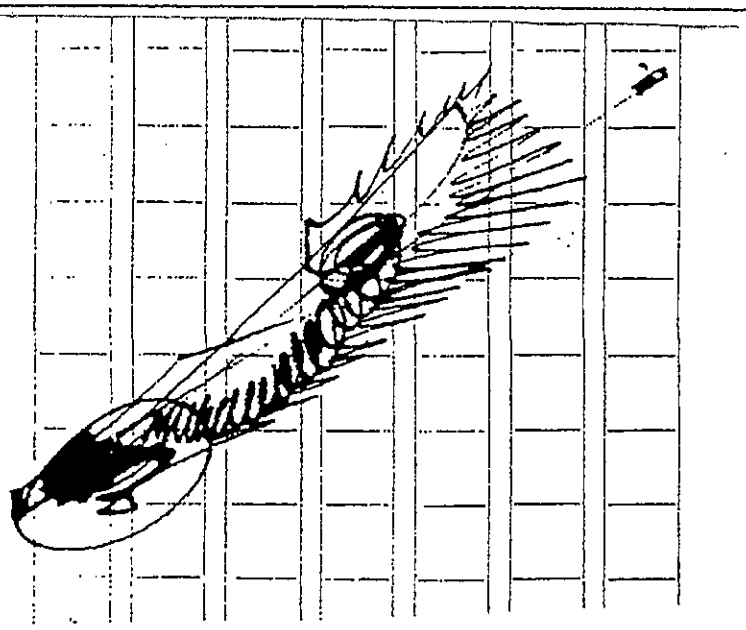
日本民族は太古以来、幣（ヌサ）と称へて墓標とはなしたるなり。

故に幣とは奉獻したるなり、捧げたるなり、身心を奉獻し終りたるなり。

而して其の標章の称呼ともなしたるなり。

大死の標章にして再生・解脱・再臨・降臨・天降・涅槃・の證左なるなり。

されば、其の人の身心に存すること因りなりと雖、形象を以つて之れを教ふるにあらざれば民人は之れを知ること能はざるなれば、別図（下図）の如く示されたるなり。



ヌサ

神象及び説明

と云ふことであります。が、それはそれとして、今一つ、川面家には、神言靈(カミノコトタマ)の所傳が有つた。けれども、共にそれはただ、傳はつて居たと云ふまでありました。

ところが、明治時代になつて、その家には、不世出の偉人川面凡兒先生が現はれた。先生は、此の二つの神傳たる日本民族の靈魂觀と、宇宙觀とを提げて、時代相應に分る樣に、一つの組織立つた說明をして、全神教趣大日本世界教と稱へられたのである。それは、昔から傳はつた其のままではあるが、說明の便宜で、其のやうな名稱にせられたまでである。

宇麻斯眞遲命の傳へと白しますのは、舊事紀に記された饒速日尊布留倍(フルベ)の神事(カミワザ)で、その傳へを、世に鎭魂傳と呼ぶ。その鎭魂歌の一つに、「イソノカミフルノヤシロノタチモガモネガフソノコニソノタテマツル」と稱する神言(ノリト)がある。之は、死生解脫の教で、此の身此のまま神の身であり、此の國此のまま神の國であり、此の時此のまま神の代であることを實證せよとの祕言である。

鎭魂と書くから、一寸解りにくいが、之は「フツミタマ」と訓むので、祓であり禊であり、祓禊であり、またその結果を指したのである。が、此の事本來神祕に屬するので、禊行事を脩した上でなければ、語ることを許されない。また、聞いても用を爲さぬのである。

所傳の言靈(コトタマ)と白しますのは、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と稱へまつる。

古事記の巻頭に、天之御中主神と書いてあるのは、「アメノミナカヌシノカミ」と昔から讀み慣れて、然う讀

むべきものと思つて、異論もあまり無かつたやうである。ところが此ここに、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と稱へまつるのは、古事記卷頭の文とは別な傳へである。其の異別は、主として「メ」と「マ」との二音に依るのである。

此の二つの御神名は、共に宇宙觀であり、神の內容を傳へたのではあるが、「アメノミナカヌシノカミ」の言靈は、專門的の解說を待たねばならぬので、一般人には解りにくい。それに反して、「アマノミナカヌシノオホミカミ」の御神名は、詞としての解說が割合に容易である。

最初の「ア」は、別に學問的に何うの此うのと云ふまでもなく、誰でも、ア、ア、ア、ア、と發音すれば、容易に分るやうに、開き開いて際限の無い意義（ヒビキ）が有る。無邊大の響きである。であるから、之を、大小の上で云へば大の極であり又小の極をも示して居る。際限の無いと云ふのは、大きくとも亦小さくとも際限が無いのである。開きに開いて涯無く限りが無いと云へば、ただ大きいとのみ思ひ易いが、限りの無いと云ふことに留意せねばならぬ。いづれにしても、極に達すれば大小を超越するのである。大小長短廣狹高卑を絕したのが極である。が、人の發音としては、大きく發し得る「ア」であるから、之を假に、大の極を示す音だと云ふ。

で、此の際涯無きものとは、ただ開きに開いたのであるから、未箇體を成さざるもので、「オホミソラ」と呼び、日本紀等には、虛中とか虛天とか書いてある。その本文を引くと、「居（オホミソラニシテ）於虛天（ミコアレマス）而生レ兒。（アマツヒコヒコホノニニギノミコトトマヲシマツ）號天津彥彥火瓊瓊杵尊（ルナリ）」「一物（オホミソラノウチニモノアリ）在於虛中」等である。此の虛天とか虛中とかを一音で現せば「ア」である。

「ア」は未物を成さず、國を成さぬので、勿論人も無い。それは抑、如何なる狀態であらうか。之を知る第一の鍵は、禊（ミソ）行事をすることである。行事を待つのでなくては、なかなか解りにくい。が、兎に角、及ぶだけ分る

やうに説明したい。

今も白しましたが、私どもは、「極」と云ふ詞を用ゐる。有る限りとか、限りが無いとか、大の極とか、小の極とか云ふ。が、單に然う云つただけでは、摑みどころが無い。それではただ、無と云ふに似て居る。無は量りやうも無ければ、思ひやうも無い。無いと云ふ物は無いのであるから、考へやうも無い。事實として、無いと云ふものは無い。ところで、極と云ふ、それは、極が有るから然う云ひ得るのである。ただ、人の能力では量り知れぬと云ふまでのことである。

此の極を、別の詞では實在と呼ぶ。無くて有るもので、有りて無きものでと云ふのだが、人間の詞で完全に云ひ現したものは嘗て無いであらう。が、音の稍近いのは「ア」である。之を説明的には、何も無いやうだとか無に等しいとか云ふ。けれども、そんな説明では仕方が無い。

形としてならば、〇と書く。此う書くのは、圓いとか方だとかに拘はるのではなく、無なる有を説明する方便に過ぎない。音に發すれば「ア」で、形に書けば〇である。人が大宇宙を眺めて、何と説明の爲方も無い。唯、唯、驚嘆するのみである。その驚嘆の聲は「ア」であり、その象は〇である。ところで、此の〇は、一切合切を包括したので、圓滿具足の象である上からは「マ」と呼ぶのである。外から觀ては、唯、「ア」と驚嘆するの外はないが、其の内を觀れば、「マ」と呼ぶミタマである。と云ふので、此の二音を合せて「アマ」と呼ぶのは、大宇宙の内容外觀を一語に包括し説明した神の詞である。

で、「アマ」なる大宇宙の大宇宙たるは、その内容が「ミナカヌシ」であるが故である。そのまた、「ミナカヌシ」の展開たる「アマ」を産出するものは、「ノ」と呼ぶミタマである。そのやうな意味で、「アマ」と「ミナカ

シ」とを繋ぐに「ノ」の音を以つてしたのである。此の「ノ」とは、野であり、奴であり、凹であり、女であり、坤であり、陰であり、人であり、黄泉醜女であり、胎盤であり、天津神輪であり、淨地沃土である。そこで、此の「ノ」の一語を以つて「アマ」と「ミナカヌシ」とを繋ぐのである。

その「アマ」と呼ぶところの大宇宙は、「ミ」と云ふ實體であり、其の實體たる「ミ」は、赫灼と光り耀いて居る。大宇宙の然る如く、都べてのものの中心は皆悉、照り耀いて居る。美しく照り耀くものは、「ナカ」であり、そのまた、赫灼たるわけは、その中に、他を引き締め統べ治むるミタマとしての「ヌ」が在るからである。「ヌ」とは、盗むであり、塗るであり、寢るであり、野である。「ノ」に等しくして僅に異るの凹地である。その「ヌ」の中には、又更に、全體を主宰し統率するミタマが在る。それを、「シ」と呼ぶ。「シ」とは、治であり、知であり、主であり、人であり、死である。則、生死一貫の義である。之を形に書けば、等しく〇である。說明すれば、零であり、一である。故にまた、極と呼ぶのである。

極とは、中心である。それは、唯一で、待對を絶して居るから、計算することが出來ず、比較すべきものが無いので、極と呼び、また、中心と稱す。これは是、大宇宙に唯一つのみである。大宇宙に唯一つ在るものとは、唯是大宇宙而耳である。

此の事實と、此の眞理とが、重重無盡無量の存在と成つて生滅起伏するのが、見る通りの現象世界である。如是の現象世界に在りて、現象と本體との分際を撤すれば、必竟神で、「アマノミナカヌシ」たる「カミ」にてまします。

さうしてその、「アマノミナカヌシ」たる「カミ」とは、「オホミカミ」と稱へまつるので、單に「カミ」と白

しまつるとは少しく異る。

「オホミカミ」に大御神の字を當ててあるが、此の大は、單に大小長短等の意味での大ではない。で、大御神とある漢字に拘泥しては、解りにくくなる。

「オホミカミ」の「オ」は、一音でも既に、「オホ」と伸びる性質を有つて居るが、その性質を更に確實に示して、「オホ」と二音を連ねたのである。それで、「オ」の音義は、伸びに展びて、際限無く擴がつて行く。さうしてその、涯無く廣がるとは「ホ」である。

「ホ」とは、燃ゆるので、火である。火炫毘古である。明なので、火火出身である。秀づるので、優れたるもので、さうして升るので、秀國である。固く強く生生發展して止まざるもので、稻の穗、麥の穗、等の穗で、水穗國の穗である。此のやうな「ホ」を、「オ」に加へて、二音一語を成したのが、「オホ」である。此の「オホ」はまた、其の活用の方面から、「オフ」と化る。追ふであり、負ふであり、覆ふである。而して斯の如きものは、「オホ」で、大である。

次ぎの「ミ」は、「ミ」と云ふミタマである。それで、「オホミ」と連ねては、高隆秀麗堅固大成するところの實としての御靈で、三產靈で、生產靈・足產靈・玉留產靈であり、身としての御魂で、三產魂で、生魂・足魂・玉留魂であるとの義で、その三產靈たり三產魂たる「ミ」は、生死遷流、出入往返、出でては歸り、歸りては出で、生へては枯れ、枯れては生へ、往生極樂、轉生死獄、發展しつつ、歸結しつつ、歸結しつつ、發展しつつ、大宇大宙、萬類萬物と、開落榮枯、連環無際、また無限。則、「カミ」にてましますなりとの義である。

次ぎに、「カミ」の「カ」は、晃耀赫灼で、開き剖くので、大宇宙の美しく照り耀ける面を眺めた嘆美の音で

あり、「ミ」は充滿實塞で、閉ぢまた塞がるので、大宇宙の堅固に締りたると共に、闇黑の土なる面を見たる否塞の音である。從つて、「カミ」の二音は、顯幽の意であり、明闇の義である。

そこで、「オホミカミ」とは、絶大無限にして、また、圓滿具足の統一體にてましますなりとの義で、「アマノミナカヌシ」と稱へまつるに等しいのである。「アマノミナカヌシ」、それは卽、「オホミカミ」にてまします。此の意味で、「アマノミナカヌシ」の次にある「ノ」は、「オホミカミ」と接續する詞ではあるが、單なる接續詞ではなく、「それが卽」の義で、「メ」の意を含んで居る。その「メ」とは、繼ぎ目、合せ目、別れ目、代り目、等の「メ」で、合ひては別れ、別れてはまた合ふの「メ」で、凹（ヒ）と描く。で、「ヒ」に通ふの「メ」であり、「ノ」である。

此のやうな所傳であるが、なほ搔摘んで言ひ換へると、大宇宙は、私ども人間的の機能相應に、一語で包括すれば「アマ」で、「アマ」の「アマ」たるは、「ミナカヌシ」なるが故で、「アマ」を現象と見れば、「ミナカヌシ」は、本體とも稱すべく、此の本體たる「ミナカヌシ」が、「アマ」と呼ぶ現象世界を發現するは、「ノ」と呼ぶ妙用に依るので、之を都べては、「アマノミナカヌシ」と讃へまつる。その「アマノミナカヌシ」とは、絶大無限でありながら、圓滿具足の統一體にてましますから、「オホミカミ」と稱へまつる。無始終で、無邊際で、そのまま、始終を現はし、邊際を示す。〇で、一で、極で、這箇である。と白すのであります。

「アマノミナカヌシ」と称へまつるに等し！

絶大無限にして、まことに圓満具足の統一体にてましますなりとの義

「カミ」にてますの義

大宇宙

連落涅槃

無限

生死還流

出入往還

三産魂＝生魂（イクムスヒ）

足魂（タルムスヒ）

玉留魂（タマツメムスヒ）

身と御魂

＝

ミ　充満実寸

閉ちまことに実がる（大宇宙の堅固に締りたる固里の土なる面）

カ　晃耀赫灼

開き剖く（大宇宙の明り輝ける面）

顯幽の意

明南

ミ　ミタマ

ホ　火、明、

固く強く生生発展して止まざるもの

オ　ホ

ホ　ミ　オ

実と御魂の御霊

＝

三産霊＝生産霊（イクムスヒ）

足産霊（タルムスヒ）

玉留産霊（タマツメムスヒ）

ミムスヒ

オ　伸びに展びて、際限なく拡がってゆく

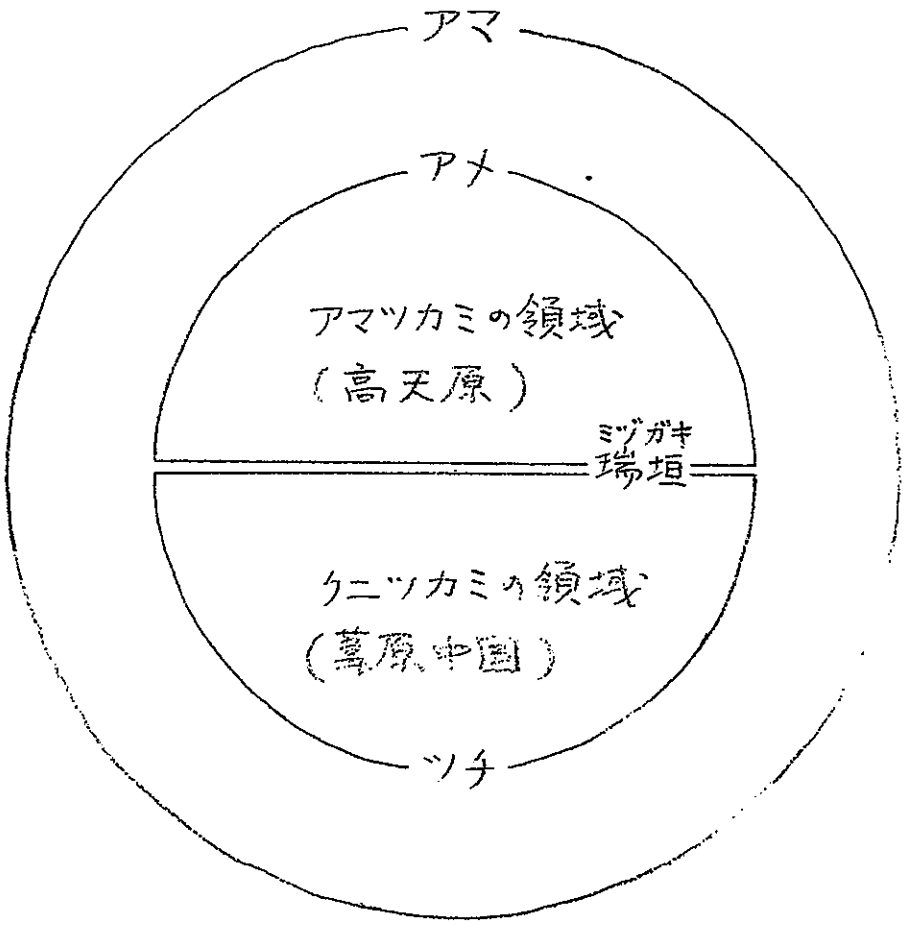
ホ　伸びる性質を有する

大

天地概略図 第二版（あくまでも概略）

コトアマツカミの領域（無宇宙）---（天石屋）
アマツカミの領域（無宇宙）----天
クニツカミの領域（宇宙）-----地

全部あわせて「アマ」



- 「高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。
- 現実には「クニツカミの領域」は顕界神域（カミの領域、狭義の中津国）と幽界魔境（マガツビの領域、黄泉国）とに分かれている。（第一版を参照）

おほそらは、はれにはれたり。あしたづの、ちよややちよと、あまぢゆくこゑ。

（タイ）

と云ふ歌があるので、之を借りて、此の境を說明する一助と爲よう。

神代の神とは、「隱身」と古事記の傳へたるところで、之を「コモリミ」と磯稻綺道秀先生から學んだが、コモリミとしては、いまだ天降り坐さざる別天神なりとの義で、鏡之船に身籠り居坐すの義で、それは、「澄み清みて明み切りたる」○海である。

人の身として之を仰げば、「カクリミ」にてまします。先師の「ミタママツリ」に、經無く緯無く始無く終無しと稱へたまへる「球體」である。球は是體。體は是球。

皆人が專心一意、天御中主大神の大御名を奉稱しつつあれば、其處に天地は發け、其處に高天原は明けて、主の神を拜みまつるべきである。其の主の神は、御一柱としては、天之御中主神と稱へまつられ、御三柱としては、天之御中主神・高御產巢日神・神產巢日神と稱へまつらるるのである。

あめなるや、あまのいはやど。こもりみの、かみのみすがた。くすしかも、あやしきかもな。ひふみよと、うけふみたれば、いつむゆな、やよここのへの、かみしらす。きみがまろやは、うちとみな、すみにすみたり。すみすみて、すみきりたれば、かくりみの、かみにこそませ。ひふみよい、むゆなやこなる。なりなりて、なりあはざるを、ふるべゆら、ゆらとをふるべ。ひふみよい、むゆなやことと、なりなりて、なりあまれれば、ひとことの、かつらぎぬしや、ほむすびの、むすぶかみわぞ、てりにてりたる。

先師の全集十卷、無慮八千頁。然れども、此の「體」を傳ふるもの僅に數言。爲に讀者往往此の祕言を看過す

て、此の行事の結果を、改めて、其の身の態度姿勢と發聲とで立證する。之を、

「天津神輪・國津神輪」の祕事と稱へて、神國築成の天津宮事で、人間身として天津宮事に仕へまつるものである。それを、「詞」として現はせば、

ひとことの、かつらぎぬしや。かみまもる、もりのさかきを、わがきみの、みはかしにして。うなねつく、わがうじものよ。しづはたの、ぬさのしづりよ。みほぎする、けふのよきひよ。ももことの、にはのこすずめ。ちちことの、かはべのちどり。なにすとか、たちはさわげる。けふのよきひに。

であり、漢字で書けば、

一圓一音昭昭琅琅。卽時救出六道魔界。神魔剖割在於一几。之是　日本天皇　敎矣。

ともならうか。固より宮事を其のままに說明し得るものではないから、唯僅に仰ぎまつる手がかりにもと思ひて記すのみである。

第十三節

天津宮事の一つに、「ヌサ」の祕事が有る。ヌサと云ふ詞は、「アマノミナカヌシ」と稱へまつるに等しき神音で、體と用と體用不一不二なる事理とを敎へられたので、現象世界と本體零位との關係を示し、兼ねて宇斗の祕を傳へられたのである。

ヌサの「ヌ」は、溫むので、盜むので、野で、束ぬるので、總ぬるので、統治し統率するもので、又、產出者

なのである。さうして、それは、「ヌシ」として、人知らぬ「ウシ」で、必竟「ウ」と呼ぶところの黑色黑光水晶宮殿なりとの義である。

ぬばたまの、うのはねごろも、とりよそひ、うとのみやにし、ひとのすみたる。

で、此の「ヌ」は、ウに對しては用であるが、サに對しては體である。さうして、それが、ミナカヌシのヌであると共に、ミナカヌシの五音を總括したる音である。

それから、その「サ」は、「アマ」に當るのである。「サ」とは、細かく割れて森森羅羅萬物萬象と現出するもので、神の雄走（ヲバシリ）であり、人の事業であり、總べてのものの氣息（イキ）である。古老は之を嘆美して「アマ」と稱した。先師は、アマノミナカヌシと稱へまつる大御名を、特に一般人に解り易いやうに說明されたが、今それを搔摘んで白しますと、

「都べてのものは、中心と外廓とから成り立つて居る。が、ただ見ただけでは、一つの物で、中心が何こに在るのか、或は無いのか、外廓と中心との區別が何こで付くのかも分らぬ狀態である。單に客觀しただけでは、何と判別の仕方も無いので、アーと驚嘆するばかりである。けれどもが、よくよく觀察すれば、「マ」として立派な統一を保ち、發展し歸結するミタマである。まことに驚嘆すべきミタマの存在であるからとて、日本民族は、それを「アマ」と讃美した。そのやうに立派な統一體の統一體たり得るのは何故であらうかと、その內容を檢討すれば、堅く締れる「ミ」としてのミタマが內在して居る。その內はまた更に、光り耀くミタマで、「ヌシ」で「ウシ」である主魂が、全體を主宰統一して居る。其のやうに、層を成して內から外に外にと擴がつたものを、中心で引き締めて逸脫することを許さない。之は何如なる物も悉皆然うなので、全宇宙としてもまた固より其の

這りである。何如に微細な物でも、何如に廣大なものでも、一貫した筋道で出來上つて居る。

之を日本民族の詞で「アマノミナカヌシ」と稱へて、「カミ」と白しまつるの義である。圓輪を以つて圖解すれば、外が「マ」で、その内が「ミ」で、その内は「ヌ」で、そのまた内は「シ」と呼ぶ。すべて四重で、その全體が完全なる統一體を成して居る。

物として中心の無いものは無い。中心に統一せられて初めて存在し得るのである。大宇宙の然る如く、小宇宙の然る如く、國家も必然るべく、全人類世界も亦必然るべきものである」とのことである。

けれども、此の御解説は、人を導き世を教ふる便宜の爲であることは白すまでもない。人に依つて大道悟證のたよりを得んと願ふものは、此の點を忘れぬやうにせねばならぬ。私はかつて、先師におたづねしたことがある。「先生には、

大日本天皇　の大御寶として、全神教趣大日本世界教を御唱道になられますが、若も、漢民族としてならば、何う云ふことになりませうか」と。すると、「國がかはれば、またまるで別だよ」と。

相互拍手。師資哄笑。記紀傳統。一圓一音。過去無師。將來無資。

よしあしの、へだてもあらず、あをみたる、ひろのせばしと、よしきりの鳴く。

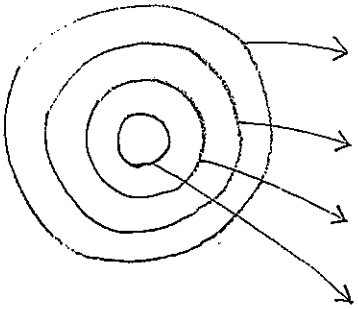
「ヌサ」と「アマノミナカヌシ」とが等しき神音だと云ふ。或は、人の疑ひを招ぐかも知れぬ。

「ヌサ」の音義は、これまでに略、説明し得たと思ふのであり、「アマノミナカヌシ」の音義も、第一章に概説したのであるが、なほ重ねて、之をうかがひまつることにしよう。

「ア」に就ては、前に磐境曲を説く際に述べたやうに、いまだ物を成さず、國を成さず、人を成さぬので、形

「アマノミナカヌシ」の図解　　(幸)191～194頁より

川面流------すべての統一体は「マ・ミ・ヌ・シ」の四重構造を成している。(191頁～192頁)



「マ」-----立派な統一体としてのミタマ

「ミ」-----堅く締れるミタマ

「ヌ」-----光り耀くミタマ

「シ」-----全体を主宰統一するミタマ

多田流-----「大の極」と「小の極」は共に「中心」である。

大の極　「ア」----大宇宙の外観
　　「マ」----　〃　内容
　　} 合わせて大宇宙の説明。

共に中心

「ノ」----「アマ」を産出する胎.

「ミ」-----「アマ」として展開されているここの実体。

「ナカ」---中心として美しく照り耀いていることの表現。

「ヌ」----他を引き締め統べ治めるミタマとしての名。

小の極　「シ」----全体を主宰し統率するミタマとしての名。

⟹「アシ」の秘言。「ウマシアシカビヒコヂ」の産魂言。

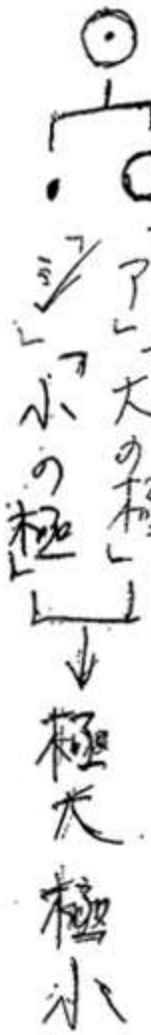
としてならば、何う書きやうも無いから、假に○と書く。それを詞としては「ア」と呼ぶ。が、此の○は、一切合切を包括して圓滿具足せる象である上からは「マ」と云ふのである。外から見たでは「ア」と驚嘆するのみであるが、その内を觀れば「マ」と呼ぶミタマであると云ふので、此の二音を合せて「アマ」と呼ぶのは、大宇宙の内容外觀を一語に包括し説明したのである。で、その

「アマ」なる大宇宙の大宇宙たるは、更にその内容が「ミナカヌシ」であるが故である。そのまた「ミナカヌシ」の展開たる「アマ」を産出するものは、「ノ」と呼ぶミタマである。そのやうな意味で、「アマ」と「ミナカヌシ」とを繋ぐに、「ノ」の音を以つてしたのである。此の「ノ」は單なる接續詞ではない。それから、その

「アマ」と呼ぶところの大宇宙は、「ミ」と云ふ實體であり、其の實體たる「ミ」は赫灼と光り耀いて居る。大宇宙の然る如く都べてのものの中心は皆悉照り耀いて居る。美しく照り耀くものは「ナカ」であり、そのまた赫灼たるわけは、その中に、他を引き締め統べ治むるミタマとしての「ヌ」が在るからである。「ヌ」は先に説明したやうな音義で、「ノ」に等しくして僅に異るのである。

此の「ヌ」の中には、又更に、全體を主宰し統率するミタマが在る。それは「シ」である。「シ」とは、治であり、知であり、主であり、人であり、死である。此の五字は皆共に「シ」と訓む。則、生死一貫の義で、之を形に書けば、亦等しく○で、説明すれば零であり一であるので、「極」である。

「ア」としての極は大の極であり、「シ」としての極は小の極である。さうしてそれが共に中心である。之を圖解すれば⊙で、圓輪を以つて「ア」を示し、一點を以つて「シ」となす。之を「アシ」の祕言と稱へて、「ウマシアシカビヒコヂ」の産魂言である。



小の極が中心だと云うことは、讀者も容易に頷くであらうが、大の極が中心だと云ふことは、或は一寸躊躇されるかも知れぬ。けれども、大であれ小であれ、極と云ふからには、唯一點であること固よりで、唯一點であると云ふものは、中心であることまた固よりで、唯一無比待對無きものとは、又唯大宇宙在るのみであることまた固よりで、此の極たる中心とは、唯是大宇宙あるのみである。之を畫いて○となすことまた固よりではないか。

此の事實と眞理とが、重重無盡無量の存在と成つて生滅起伏する。それを現象世界とながめては「アマ」で、其の現象を發現する本體を究め來れば「ミナカヌシ」で、本體と現象との分際を究明し得れば、おのづから本體と現象との牆壁は撤去せられて、一圓一音昭昭琅琅、日神は天窟戸を出でさせ給ふなりと、人は拜みまつるのである。

「アマ」を現象世界だと云ふのは、「ミナカヌシ」に對するが故なので、その「ミナカヌシ」とは、大裏觀したる神界で、それをそのまま大表觀すれば「アマ」である。それ故に、天地初發としての「アマ」は、「ミヅ」の大平等觀で、稜威赫灼一圓晃耀の象である。それで、「ミヅ」に對すれば「アマ」が本體となるのである。

「アマ」を別の詞では、「日神の御田」と稱へまつりて⊗と描き、また田とも、⊞とも描く。それは、器を產出する大海で、大虛空であるとの義で、「ヒツキ」と呼ぶ。此の「ヒツキ」の中にして、神子（カミノコ）は生れさせ給ふ。その「ヒツキ」とは、○◐であり◯であり、「カミノコ」とは、▲であり「ミヅ」であり、稜威雄走命（イツノヲバシリノミコト）と稱へまつるのである。

「ヌサ」の祕事を祭儀として行ずる爲に作られた神器が存る。之は、圖解を要するのだが、兎に角、外に顯れぬ中心が在る。それは、「ウ」と呼ばるるのであり、外に細かく分れた部分があつて、それを「サ」と呼ぶ。さ

2020.2.11.(火)

幸194

本体(大裏観) ミナカヌシ
↓ | } アマノミナカヌシ
現象(大表観) アマ 即.ヌサ

このアマを本体とすれば、
↓
ミヅは現象(本体がそのままに表現されたもの)

→よって、宇宙の側における、ヒフミヨイの(ミ)としてのミヅは、ヌサという本体からの表現であると解釈することができる。故に、ミヅの代わりに、その本体であるヌサを用いることが可能である。

うして、此の「サ」と「ウ」とを一つに結び止めた部分がある。それをば「ヌ」と呼ぶ。之を全體として「ヌサ」と稱するのである。

此の「ヌサ」の神事は、祓の神の教へとしては、「天津菅曾を本刈り斷ち末刈り切りて、八針に取り辟く」もので、禊の神の教へとしては、「天津金木を本打ち切り末打ち斷ちて、千座置座に置き足らはす」もので、祓の神は、罪障を焚盡して火の海と成し、禊の神は、天湍河のミモヒを灑ぎて神界樂土を築き成すのである。

古老詠ふて云はく、

海は逃げ、山も躍ると、古の、ふみにぞ書ける。日の神の、わざこそ成れれ。月夜見(ツキヤミ)の、矢こそは立てれ。

白玉の、眞玉の中に、眞つぶさに、統一る中に、神こそは、鎭り伊坐せ。日止こそは、止まりてあれ。日止知らす、國は安けし。神守る、嶋ぞ統一る。海はなぎ、山靜なり。やまと國原。

と。

斯くて、祓の神とは、黃泉大神(ヨモツオホカミ)として、根の國・底の國を治らす伊邪那美神にてましまし、禊の神とは、三貴子を生みまし給ふ中津國の主神伊邪那岐大御神にてましますことを明らめ得るのである。

今年來て、我また息ふ、綿津見の、いろこの宮は、神の常宮。

第十四節

朝早く目の覺めたままに、そのままに、硝子戸越しの外を見ると、柳の絮綿が・之を綿と呼ぶことは、奉天の

子供たちに聞いたので、枝垂柳の實が熟して、風のまにまに、或は、神のまにまに空に遊ぶので、遊ぶとも飛ぶとも形容し兼ねる輕い輕い樣子で浮きて居るのである。羽化登仙などと云ふ詞は到底當らない。上つたり下つたり、流れたり飛んだり、散つたり聚つたり、行つたり來たり、唯遊んで居るのである。降りても集つても浮きて居るので、何の作意も無く喜戯する小兒の友にふさはしく、苦しみを知らず、惱み無き姿である。それを眺めて居る身も、おのづからそれに引き入れられて、何の障るものも無い。それは丁度、ミソギの行事果てし其の朝の境涯にでも比べようか。過ぎ來しことも忘れ、行くべき先をも思はず、今在る身をも知らぬ狀態である。

此のやうな狀態を、古老は〇と敎へた。無と呼ぶに等しいので、宇宙無きもので、未宇宙を成さざるもので、零と呼ぶ。それで、之を「隱身」と記し、「罔象女」と稱へて、「象(スガタ)ハ無キナリ」と敎へられたのである。

けれども、「無いと云ふものは無い」と先師の敎へられた如く、無宇宙とか〇とか呼ぶのも、絕對の無とか頑空とか云ふのでないことは白すまでもない。

さて此の〇なる境涯とは、全宇全宙牆壁無く障礙無き狀態で、境涯無き境涯とでも云ふべきであるが、之は此のままに、千態萬樣、百八百萬魂神(モモヤホヨロヅミタマノカミ)として、境涯を築き神德を顯はしつつまします。之を、

〇(ヒ)が〇(ヒ)のままに產靈產魂(ムスビ ムスビ)たる神(カミ)と稱へて、「天津神」にてましますのである。

柳の綿が、虛空に散つて、それがそのままに集り聚る。嵩は大きくなつても、そのままなる本の質を失はない。何處から來たのか、子供達は、何(ド)の樹から何う飛んで來たのかも知らぬながらに、柳の綿を拾つて居る。

ところが、間も無く、それを丸めて土の上に捨ててしまふ。捨てられた綿には、細かい細かい實が附いて居る。その實は、水と火と、日と月と、天と地との溫熱濕潤に包まれて、時經つままに芽が出る。その芽には、綿の姿

も實の樣子も止めて居ない。一年二年三年五年十年と時は流れて、その時の子供も妙齡の美人と成つた。が、青青と繁つた門の柳、五本の柳を、かつて自分が丸めて捨てた柳の綿の生へたのだと知るよしも無い。

青雲の、たなびく雲の、我が門の、五本柳。若柳の、いと面白く、立ち靡く、糸の結びて、今日もかも、繁り合ひたり。いや榮え、榮え行くべく、結び置きし、門の若柳、枝分かずこそ。

天津神の○は、何如に結び結びても○であるが、その○の結び成り成りて成り餘る身と、成り合はざる身との相偶ひ相交はるに到れば、天地の隔たりが遠くなり、天地を繋ぐ浮橋の天浮橋が失はれて滄溟と化してしまふ。すると、鹽土神の任運（ニニマニ）、萬のものが生り出づるのである。生り成りて生り出でし身は、一定の範疇を築くので、それは既に元の如き○ではない。

此の範疇とは、先に述べたやうに、「ア」で、「畔（ア）」で、「吾（ア）」で、「足（ア）」で、「イノチ」である。

範疇としての「吾（ア）」は、もはや、○ではない身（ミ）である。之を◎と描き、或は、◎とか◎とか畫くことも出來る。此の「ミ」も、その本體としての○のままなる活用を彰はすならば、それは、天津神に等しき人天萬類であるからとて、國津神と稱へまつり祀り來つたのである。如斯き「吾（ア）」とは、發き發きて際無く限無き大宇大宙としての「ア」が、「ア」のままに結び結びたるに等しき「我（ワレ）」なりとの意で、讃辭（ホメコトバ）である。と云ふばかりでなく神輪の祕言なのである。

それで、「國津神」と稱へまつるは、神であつて物であつて、物でもあり神でもあるので、國津神大山祇と稱へては、土塊でもあり、水でもあり、火でもあり、草木でもあり、毛（ケ）の和物（ニゴモノ）でも毛（ケ）の麤物（アラモノ）でもある。其の女石長比賣・木花咲耶比咩と稱へては、國土の神・水火の神にてましますと共に、國土にてもあり水火にてもあるので

ある。

人が五官的に認めては、物であつて重濁の姿であるが、その物そのままの直日は清陽にして、天津日の光充ちたる神にて坐しますのである。直日としては、〇に等しき身であるからとて⊙と稱ふるのである。

人天萬類が、此の⊙と成り此の〇を顯はすには、「ヌサ」の「サバキ」に依りて、過去を祓ひ、將來を祓ひ、現在を祓ふ。

過去は、一歩一歩と自分の踏んで來た道である。それを、時間的には、一分前一日前一月前二月前、また、一年二年十年二十年五十年前と回顧しつつ、空間的には、通つて來た境地を辿り辿つて、思ひ浮ぶかぎり、また、想ひ起し得ざる範圍でも、踏み來り通り來つた都べてを祓ひ祓つて、現在の人間身としての過去の一切を祓ひつつ、母の胎内に在りしその時とその境とその身とに及ぶ。其處は、我が身としての「鏡之船」。

眞澄鏡・增鏡・增靈鏡・眞十鏡・增日鏡・眞經津鏡・天御鏡・鏡之船・上天下地・盡天盡地・唯一零界・大平等海。

大平等海裡に結び結びて成り出でし身は、神魔剖割して一几に在るもの。斯くて、本來、此の身の〇なることを知るのである。

母の胎内にまで祓ひ祓へども、未其の來るところを明らめ得ないならば、更に、其の前に前にと遡る。父母の父母の父母の父母のと遡りて、人間身天降の境と時とその身とに及ぶ。すると、それは、劫火洞然奇振嶽の巓で、白玉光である。

白玉光底に潺湲たるの泉は、之我が祖國で祖神で、悠久の昔である。

第七、「國嶋産出」とは、天成り、地定りたる曉なので、祓禊の結果として、一圓光明の大虚空を仰ぎたる時、それは、○であるから、太極とも呼び、小極とも云ひ、兩儀とも、陰陽とも、神とも、魔とも、空とも、實とも、火とも、水とも、エホバとも、マヤとも、マリヤとも、アバイロンとも、ヤーマとも、母とも、父とも、天とも、地とも、無とも、有とも、無一物とも、物とも、理とも、點とも、線とも、面とも、零とも、一とも、二とも、三とも、五とも、十とも稱するので、一であるところの一切で、物無きの境地である。物は無いが、境地としての零界を保有するのである。で、之は、無の有と呼びて、位置のみ存るのである。

位置のみだと云ふのは、未、物を成さざるので、物と成るべき資料の存るのみである。其の資料に依つて、箇體を築くには、其の種子が無ければならぬ。其の種子を「し」と呼ぶのである。「し」とは、死であり、知であり、治であり、主であり、人であり、統治で、統率で、我である。此の種子は、其の初、唯一點としての位置を占めただけであるから、未、量に上らないのであるが、其の種子の萠騰出づる時、葦牙の如くであるとて、之を、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へて、「ほ」と呼ぶのである。訶備とは、穎の複數語で、萠えに萠えたる穂で、△である。△と圖示するのは、箇體發生の上から、等しく、箇體たる人類の便宜なので、⊙と畫くに等しいのである。故に、之を擴大し、說明を加へて、⊕と描くも、※とするも、或は、⊗、又は、◎、又或は、◉と描きまつるも、共に等しく、・を種子とし、△を原型とし、⊙を標識基準として、生れ出でたる相である。之を言ひ換へると、死と呼ぶところの零から、其の零を資料として、此の生を生ずるので、之を「しほ」と稱し、鹽とも、潮とも、汐とも書き、此の妙用を主る主體を鹽椎神と稱へまつり、其の創造せらるる狀態を形容しては、「宇麻志阿斯訶備比古遲」と稱へ、內容を解說しては、「二柱祖神」「修理固成天沼矛」「天浮橋」「鹽固袁呂固袁呂」「淤能碁呂嶋」「天御柱」「八尋殿」「美斗能麻具波比」「布斗麻邇」「大八嶋國」と傳へたのである。

それは、大虚空に、一點を認めたる時、其の一點が、旋廻し統一して、箇體たる宇宙を築く。其の旋廻し統一

持つて居る。で、先づ最初に此の音を出す。すると、現在の自分が、どれだけの力を持つて居るかがはつきりと其の音聲の上に現はれる。續けて又出す。連續して出して居ると、次第次第に強くなり、更に正しく美しく、威嚴を加へて來る。發して發して止まざれば、やがて、肉體と精神とが完全に統一して、凝止結晶、金剛不壞の神身を築き成すに到る。

第二の「エ」は、イとは反對に上下の齒を離して、舌を下げ氣味にせねば發し得ず、横に開いて廣がるのである。が、その廣さには限度が有る。横に並行の二線を引き、中央を縱の一線で劃つたのは、此の意味で、區劃を示し、分限を教へて居る。此の縱の一線を畔と呼びて、斯く在るべきものを斯くあらしむる軌範を教へられたのである。

畔は吾なので、存りて在るもので、結び止めたる靈であるから魂と呼ぶ。その結び止むるものを「ア」と稱して、玉の緒の別名である。それで、畔放と云つて祓言に擧げた天津罪は、汚濁なる生活に慣れて居る人間世界では、それ程に思はぬでも、實は甚しき反逆で、神命冒瀆の大罪だからとて、其の第一に數へたのである。

畔として、吾としての軌範に制せられたる二は、天御柱・國御柱で、各自各自の位置分限を堅持して、相互に干犯冒瀆するが如きこと無きものである。從つて此の音には制御の力が強い。繰り返し繰り返して此の發聲を續けると、自己を引き締め他を警むる威嚴を增して來る。

そこで、正しく升る音のイを強く長く引いて、制御の音のエと連ねて切ると、イーエッと成る。小さなッは、上の音を切る符號であると共に祓詞であるから、エの音義を更に強むるのである。さうして、之を繰返し繰返す。非常に強い善美正義の音であるから、自己を警醒し他を制御して正誠ならしめねば止まぬのである。從つて

No.

Date

幸180頁ほか より。

(ヒ)の段階　根本質料、零(ヒ)、霊(ヒ)とも書く。
(直霊(ナホビ)①)

(ビ)の段階、→結び止めたる霊(ヒ)、魂(ビ)　(幸180)
直霊(ナホビ)②という用語はここまで含めて言う。
└この結び止めているものが タマノヲ、「ア」、

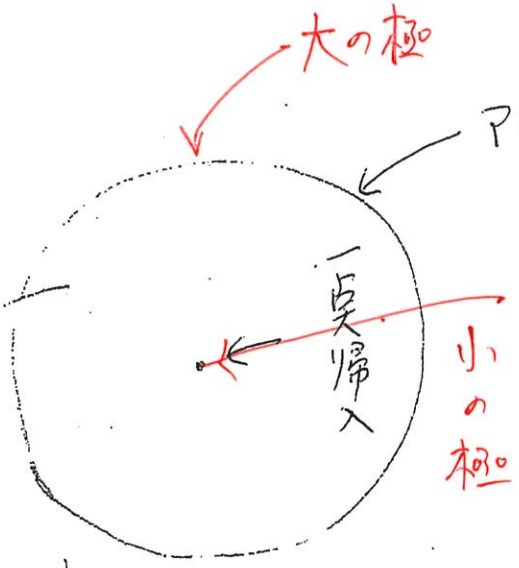
(タマ)の段階、直日(ナホヒ)、霊(ビ)。(当然ながら、タマノヲを構成素材とする。)
魂という用語はここまで含めて言う。

ミヅガキ、

出入往返するものを指して、
奇霊(クシビ)と言う。

みたまつりにおける
アマノミナカヌシノ
オホミカミの
先祖諸魂の
慰霊のやうう

沼田代前生の父母祖の京の魂
縁由諸有諸魂
母方代前生の父母祖の京の魂
母方代前生の父母祖の京の魂
母方代前生の父母祖の京の魂
母方代前生の父母祖の京の魂



この丸と点は
大宇宙を点はその中心を示し一点を出でて一点
に入るを教ゆるものであります。

皆得解脱

阿々日賀一点明々琅々

(毎月のみそぎの時は)
西の海大海原の沖の瀬は
汚れを被う磯の荒波

(夏越しの祓は)
水無月の夏越しの祓一する人
なら千年の命延ぶと云う

名前の分る方は名前を書いて
頂くのがよいと聞いております。

記入方法

心身を清澄にして
筆に受火
二十一秘言をとなへつつ

ひふみよいむなやここのたりや
ももちちみたり

紙に受火して紙を返う
目の上にかかげ フーと
息を吹きつけ 諸魂を
一点帰入させる。

大正人道教主人

多田山公吉秘稿

大正人道教主人とは直日にして、國家にありては國主なり國一なり國言なりにてましますなれば、家庭に於ける戸主なるべ、組合に於ては組合長にして社にありては社長なり、會長りにして、世界人類としては迦なり、基督なり、天照大御なり、天帝なりにてましますり。

其の故は、生死遷流しつつ生命なり、美面止(みこと)なれにして大宇大宙のその相(すた)なり、その事理なるなり。

然れども、人の身は箇體とし限られたる世界に生活するがに、其の身の来由を知らず、路を無ぜずして、箇體に執着、見聞し得る範圍に於て目的準を定めんとするなり。

於此か、所謂、偶像を目標とせざれば確實感を得難くして、人爲の對照體を求めて初めて安心立命を得たりとなすなり。

佛像佛画の本尊と称し、神像神體と称するものと共に、天皇と称するも亦然るなり。

大正人道教主人とは神直日なり。

而して、體にして、魂にして三にして、二にして、一にして日にして、月にして、日月にして、四象にして、兩儀にして、大極にして、無極にして、極無極にして、如是なり。

メにして、ヒにして、フにして、ヒメにして、ヒコにして、ハルヒヒメにして、ふふ。にして十種にして、三種にして、一二三四五六七八九十百千萬にして寿なり。

之れを人天萬類の基準となすなり。

否、基準なりと知るなり。

ヒフミヨイムナヤコココノタリヤモモチチミテリ。二十一秘言

アアヒガテンジンユウアイコウ。

十年依然梧下蒙
三日忽然高峰櫻

さくらばなさきのさかりをあまをとめよにさちあれとあさつとめする。

嘉経一巻

あちめあちめあちめあちめあちめ。

嘉経一巻

朝陽図一幅

ちちははみおやみおやみなともにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。

おおおおおおおおおおおお。

ああひがてんじんゆうあいこう。ミクマ マウリのノリト

◇

今日今時人不来
風塵掩空日光不明
虚名徒書於世間
三年不鳴鵬雛情。

つるのこのそのひとこゑはそらたかくけふほがらかにひびきわたれり。

◇

山の井の筧の氷今日解けて蕨萌えたり陽炎のして。

昭和十二年四月八日　木曜日　晴　後に薄曇。

昨夜東海漁翁之嬢子来云。

我是第三神界主神之女也。

今日以後厳侍於後宮。

紫の縁由たづねて人ぞ寄る今日をば八日と神の治らして。

ああひがてんじんゆうあいこう。

よし。

まさかきはいろうつくしくなつやまのしじにしげればよしとこそのれ。

ああひがてんじんゆうあいこう。

はるひひめはるひひめはるひひめ。

ああひがてんじんゆうあいこう。

あさもよし。きのべのみやと。かみのうけひて。かみのうけびて。かみのをしへて。かみしらすまに。

あさまやま。

ひとこそあふげ。

二十一秘言とミタママウリのノリトを称へることにより、大宇宙の相を知り大宇宙の大中心としての宮体となる。

神直日の神傳メヒフフフ

語知らずといって読書子を罵る語が存る。私も小児の頃、其う云はれた覚えが有る。けれども願はくば、論語知らずでありたい、あれかしと自他に奨むるのである。奨勵ざるを得ないのである。

論語に何が存りますか。禘を問ふ。孔子曰く、知らず。

禘が祕事であることを友人に語った時、友は、それでは孔子が知らずと云ったのは当然だ、知って居たからとて人に話すべきことでは無いと評した。それはそれで可い。禘を知る時、喪は哀しめと他に教ふる馬鹿は無い。

天文地理を観察して幽明を知り、始を原ね終りを反して死と生とを知り、物の解けたり結んだりするのを見て神を知り、妖怪変化の出没するのを観て鬼を知ることが出来ると繫辞伝に記載した。此れを見れば孔子が何如に俗人で、何如に低劣な思考に没頭していたかが明瞭と頷けるであらう。

病人を治療するに対症療法と云ふ語が存る。病原は判らぬが疼いとうったへたらば鎮痛剤を与る。熱が出たと云ったら解熱剤を呑ますと云ふのだ。之れでは病原には或は有利であらうとも駆除さるる用にはならない。

孔子の真理観なるものは正に此の藪医者である。

然も、世上の易学者だ、大儒者だと云ふ人人は之の数句を易の三知とか呼んで守護神のやうに云って居る。之れ等を気に迷ふものだと古老の誡めたところで、最、留意して解脱すべきである。

六道解脱の大敵は気である。気が主動者となって六道を転輾輪回さすのである。最、留意すべきは気である。

然らば気は何如して解脱するか、制御するか。

佛法は火を以って焚けと教へて居る。許多の地獄を説明して悉く皆、之れを救済ふに火を用ひて居る。火を以って焚き尽せば、此の迷乱へる心を美しく整理して日光（ひかり）と成すことが出来る。

禘が行ぜられたる暁には、泰山が湧出するのは、また是れ一圓光明体と成り得たのであるから、同じく日光である。

日光とは善美正直なる箇体である、小宇宙であるから、直日（ひと）である人である人身である。

斯のやうにして一圓光明の日光と成し得た時、解脱り得た暁此の身此のままのお地蔵さんで此の土此のままの極楽浄土である。高天原で海原で国原で天香具山で洲で国で別である。日光の身と成り得た暁には十種神宝と日本民族伝承の言霊である。

以上　昭和九年十二月二十二日

地蔵佛界（四）

多田雄二

印度では佛陀と伝へたので、別の言で云へば一圓相で一音響である。ですから基督教の誓約に言（ことば）は神なりき、光は神なりきと伝へたところと同義である。

人間身にして此の一圓相と成り、一音響となる方図を日神事と称へまつりて天津神の教へたまふところであります。

印度の佛伝では不幸にして今は伝へ得て居らぬし、基督教の伝へも亦今は断絶してしまったのである。

支那民族の伝承へて来た禘も黄道も今は全く行ずる人を失ひ知る人もないのである。

地蔵佛地蔵菩薩の祕言霊と祕事とは現今、単、日本神道に伝へ得たのみである。

大日本祓禊存るのみである。

以上　昭和九年十二月二十三日

劫火と云ふ。劫は時間であるから、劫火とは時到りて一切罪業は消除せねばならぬ、必、消除すべく償還を命ぜられるるのであるとの義で無間地獄の火である。

之れを日本語ではスリと伝承へて来たのを古事記編纂の際、太安萬侶が修理の支那文字を充当てた為、後人が読み誤ると共に、原語の意義を忘れたのである。

それでスリとは禍津日。

禍津日とは悪魔を調伏済度し救出して善美正直ならしむる加美（かみ）である。之れを日とも日神とも称へまつるのであります。

日神事と称へまつるは之の神事であるから、世人の云ふやうな仇敵と名づくべきものは無いのである。一切は日光であり加

スリとは

劫火であり、無間地獄である。

時至りて、一切罪業は、必ず消除すべく償還命ぜられているものである、との意味である。

また、禍津日ともいい、悪魔を調伏済度し、救出して善美正直ならしむるものである。

これを日とも日神とも称えまつる。

地蔵佛界（四）

天祖の作用力を天照坐皇大御神と云う。

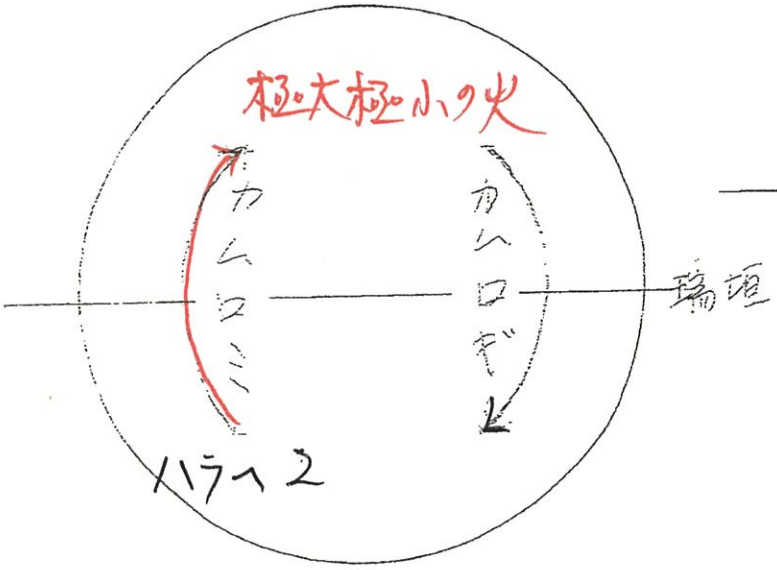
その作用力を二つに分ける場合

大宇宙を領域として分ける方法が二通りあるので、

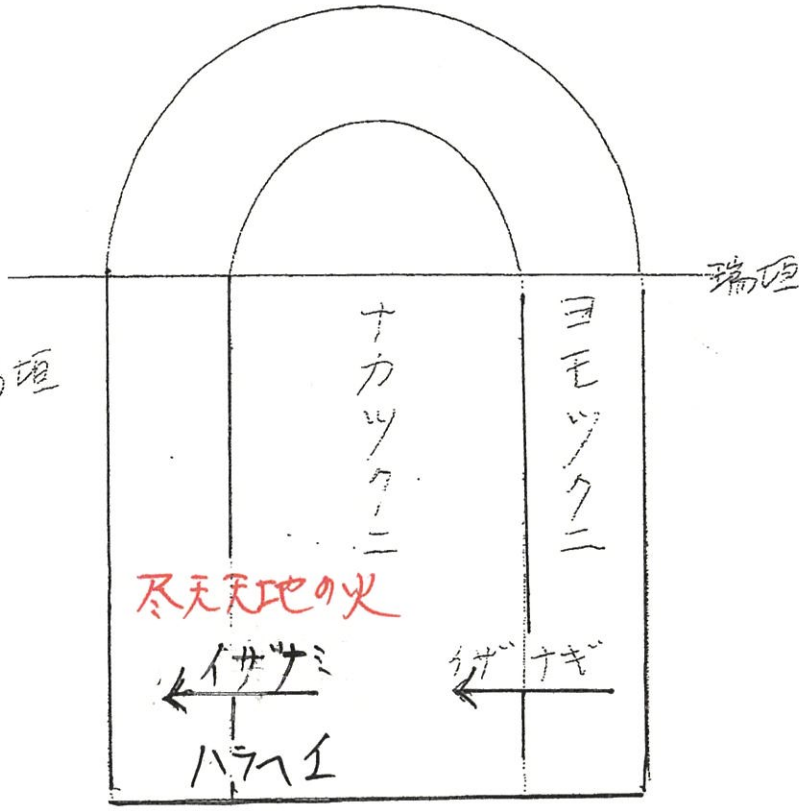
それに応じて、作用力の分け方も二通りあり、

それぞれに別個の神名が当てられている。

1．上下にわける。



2．内外に分ける。



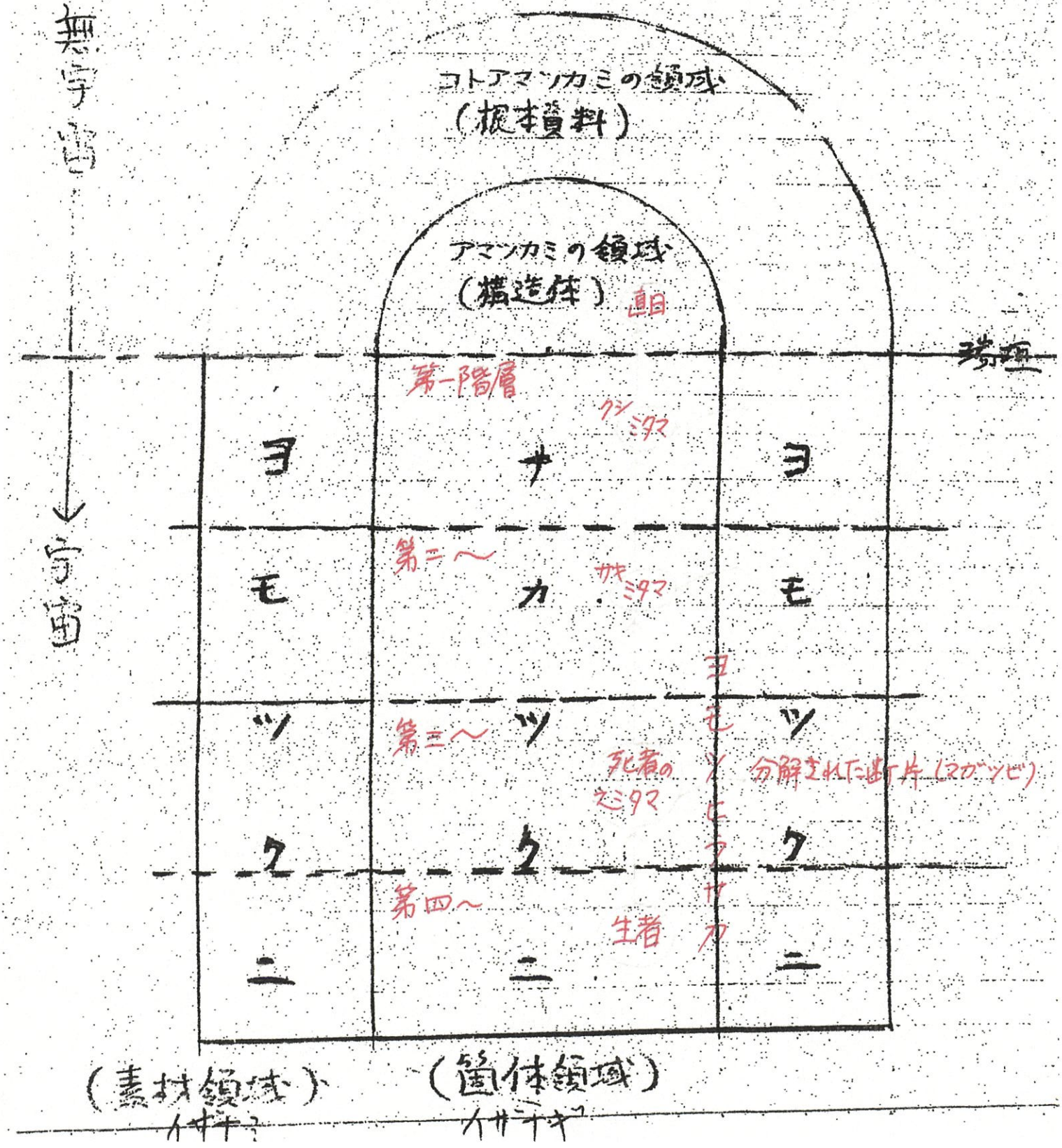
上から下へ　カムロギ

下から上へ　カムロミ（スリ）

外から内へ　カタメナス　イザナギ

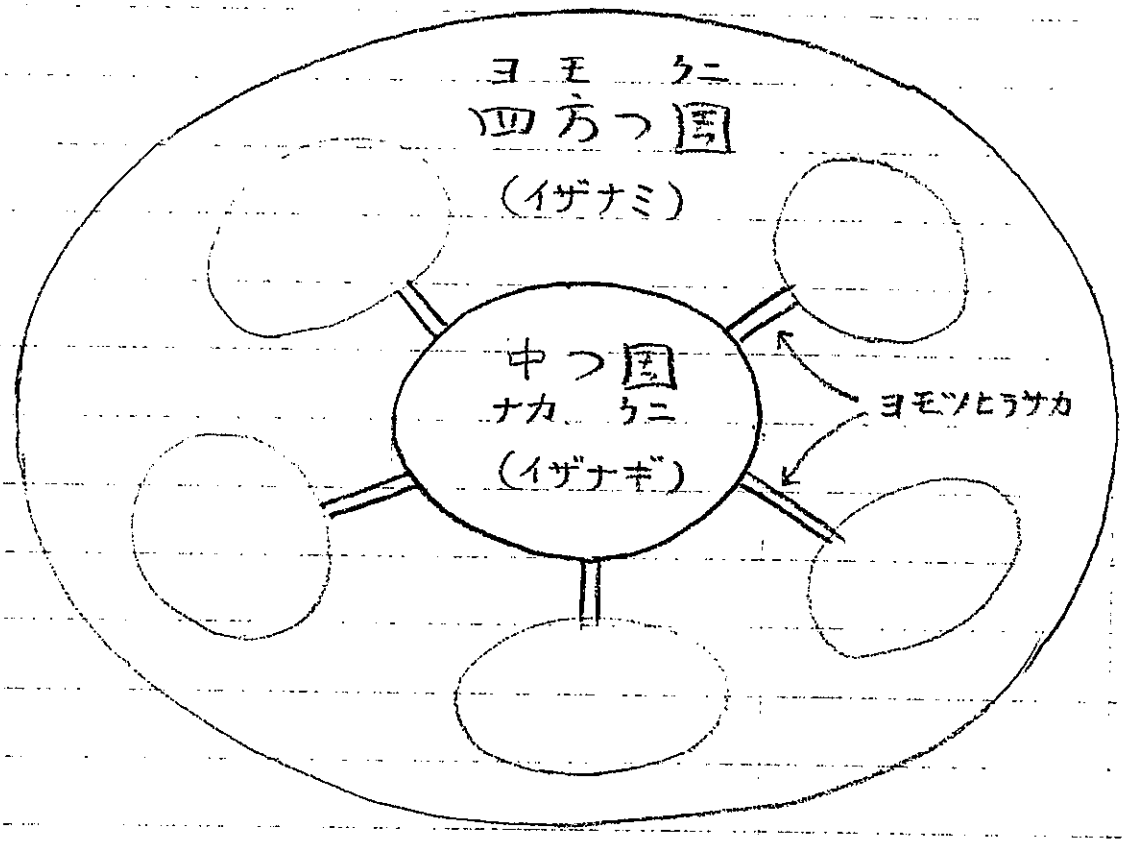
内から外へ　スリ　イザナミ

「無宇宙」と「ナカツクニ/ヨモツクニ」との関連

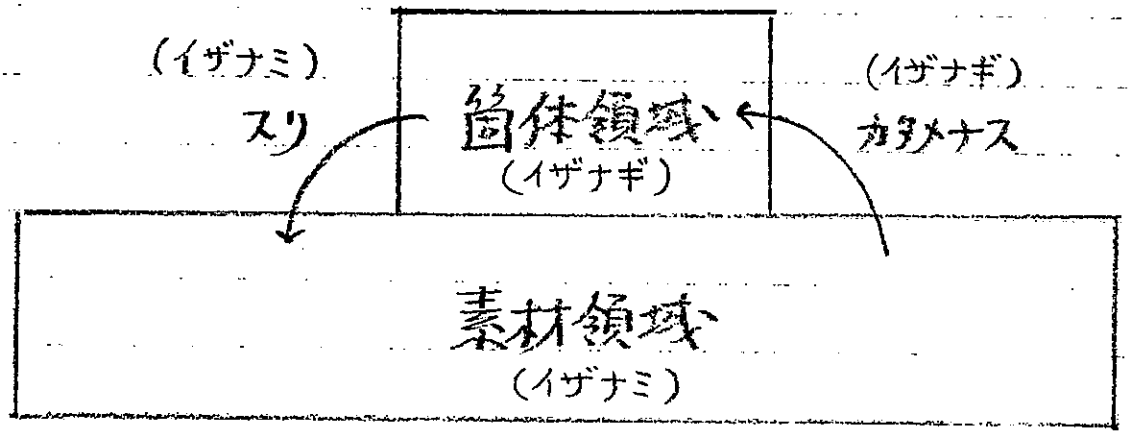


ナカツクニとヨモツクニの関係

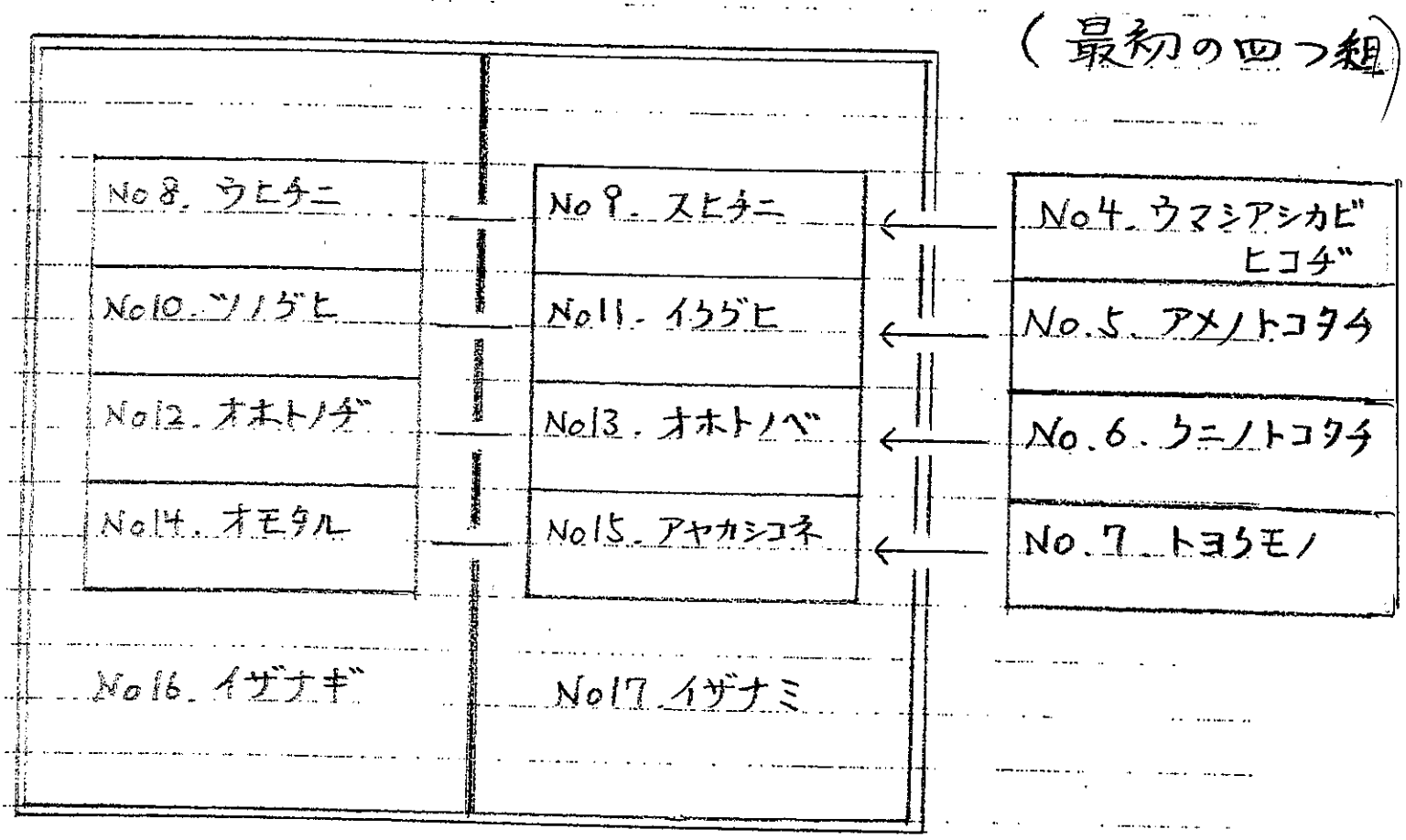
むしろ、中心と外部の関係と考えた方が良い。



あるいは、上部構造・下部構造として



図表2. イザナギ・イザナミの内部構造

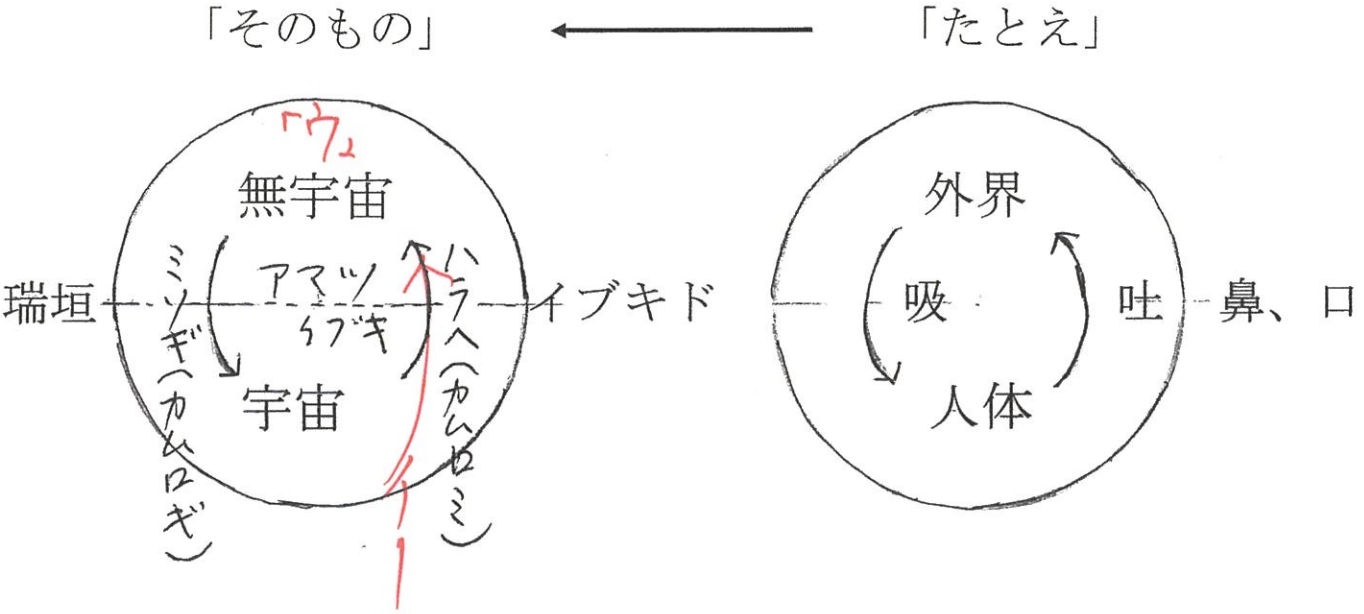


全体として、イザナギノオホミカミ、
もしくは、イザナギイザナミフタハシラミオヤノカミ、

No.8〜15の八神は「内容」なので、
以下、独立の神格としては扱われない。

零の作用と天津伊吹

コトタマとしての「イキ」は、本来、「零(ヒ)の作用」のこと。
「ミヅ」とも「イブキ」とも言う。
「零(ヒ)」そのものは、無宇宙と宇宙の間を自由に行き来するので、
それを呼吸に喩(たと)えたのである。
その意味においては、「瑞垣(ミヅガキ)」を「イブキド」とも言う。



帰天作法における「天津伊吹(アマツイブキ)」も、この意味であり、具体的には、
直日(ナホヒ)を「宇宙」の側から「無宇宙」の側へと「送る作用」を意味する。

神のイブキとしては、カムロキもカムロミも斉(ひと)しく「イ」なのだが、
人間(ひと)の身で「イー」と唱える際には、もっぱら無宇宙へと上昇する側を指す。

三 九州の日向の国の橘という小さい瀬戸のほとりの檍原という所。その所在は今不明。

四 書紀に「因曰二自レ此莫レ過、即投二其杖一。是謂二岐神一也。」また「乃投二其杖一曰、自レ此以還、雷不二敢来一。是謂二岐神一。」とあって、岐神をフナドノカミと訓ませている。また道饗祭の祭神の一に「久那斗」がある。フナドは経勿所、クナドは来勿所で、ここから来るなの意。

五 書紀には「長道磐神」とある。道の長道を掌る磐の神の意であろう。帯から連想したもの。

六 名義未詳。

七 書紀には「煩神」とある。煩いの主の意。

八 袴と同じ。腰から下に蔭るもの。

九 道の分れた所を掌る神。道饗祭の祭神に「八衢比古、八衢比売」がある。衢の神。

一〇 冠とあるは不審、御蔭(ミカ)即ち霊のことか。播磨風土記神前郡蔭山里の条に「品太天皇御蔭堕二於此山一。」とあり、持統紀元年三月の条には「以二華綬一進二于殯宮一。此曰二御蔭一。」とある。これらを参考するとミカゲと訓むべきかも知れない。

一一 書紀には「開闕神」とある。ただし褌に化生した神。名義未詳。

一二 玉などをつけた手にまく装身具。

一三 同神を沖と辺に分けたもの。疎は遠ざかる意。

一四 ナギサは波限(汀)。

一五 カヒは間、ベは辺、ラは接尾語。遠い沖と汀の間を掌る神。

一六 前の六神は陸路の神、後の六神は海路の神。

一七 瀬戸の上の瀬は潮流が早い。

一八 瀬戸の下の瀬は潮流が緩やかである。

7 禊祓と神々の化生

是を以ちて伊邪那伎大神詔りたまひしく、「吾は伊那志許米上志許米岐(此の九字は音を以ゐよ。)穢き國に到りて在り祁理。(此の二字は音を以ゐよ。)故、吾は御身の禊爲む。」とのりたまひて、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐(此の三字は音を以ゐよ。)原に到り坐して、禊ぎ祓ひたまひき。

故、投げ棄つる御杖に成れる神の名は、衝立船戸神。次に投げ棄つる御帯に成れる神の名は、道之長乳齒神。次に投げ棄つる御嚢に成れる神の名は、時量師神。次に投げ棄つる御衣に成れる神の名は、和豆良比能宇斯能神。(此の神の名は音を以ゐよ。)次に投げ棄つる御褌に成れる神の名は、道俣神。次に投げ棄つる御冠に成れる神の名は、飽咋之宇斯能神。(宇より以下の三字は音を以ゐよ。)次に投げ棄つる左の御手の手纏に成れる神の名は、奥疎神。(奥を訓みてオキと云ふ。疎を訓みてザカルと云ふ。下は此れに效へ。)次に奥津那藝佐毘古神。(那より以下の五字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。)次に奥津甲斐辨羅神。(甲より以下の四字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。)次に投げ棄つる右の御手の手纏に成れる神の名は、邊疎神。次に邊津那藝佐毘古神。次に邊津甲斐辨羅神。

右の件の船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前の十二神は、身に著ける物を脱くに因りて生れる神なり。

是に詔りたまひしく、「上つ瀬は瀬速し。下つ瀬は瀬弱し。」とのりたまひて、

一四 海を掌る神で、これを底・中・上に分けたのである。書紀には「少童命」と記している。
一五 筒は星(つつ)で底中上の三筒之男は、オリオン座の中央にあるカラスキ星(参)で航海の目標としたところから航海を掌る神とも考えられる。また山田孝雄博士は、「底つ津の男」「中つ津の男」「上つ津の男」で、津則ち船舶の碇泊する所を掌る神とされた。
一六 上をカミと訓まないための注であるが、ウハと注せずにウヘとしているのは、通常の語、記伝にいわゆる「言の居たる方」を注したのである。
一七 阿曇は氏、連は姓(かばね)。カバネは氏や家の尊卑をあらわす称号。連の姓は主として神別に賜わったようである。
一八 祖先神。
一九 「以ち」は接頭語、イツクは斎くで、心身の穢れを去って神につかえること。
二〇 名義未詳。新撰姓氏録には安曇連は「綿積神命児、穂高見命之後也。」(河内国神別、地祇)とあって伝を異にしている。
二一 摂津の住吉の大神である。ただし延喜式神名帳には住吉坐神社四座、住吉大社神代記にも御神殿四宮としている。これは神功皇后を加えたからである。
二二 天にましまして照り給う神の意で日神。
二三 月神。月読は月を数える意で暦に関係がある語かと思われる。書紀には月弓尊、月夜見尊などとも記されている。月神は男性と信じられていた。
二四 勇猛迅速に荒れすさぶ男神の意。嵐神。以上三神の化生と類同した伝が釈史巻一所引の五運歴年記に見える。即ち「啓レ陰感レ陽、布二布元気一、乃孕二中和一。是為レ人也。」

8 三貴子の分治

初めて中つ瀬に墮り迦豆伎て滌ぎたまふ時、成り坐せる神の名は、八十禍津日神。禍を訓みてマガと云ふ。下は此れに效へ。次に大禍津日神。此の二神は、其の穢繁國に到りし時の汚垢に因りて成れる神なり。次に其の禍を直さむと爲て、成れる神の名は、神直毘神。毘の字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。次に大直毘神。次に伊豆能賣神。并せて三神なり。伊より以下の四字は音を以ゐよ。次に水の底に滌ぐ時に、成れる神の名は、底津綿上津見神。次に底筒之男命。中に滌ぐ時に、成れる神の名は、中津綿上津見神。次に中筒之男命。水の上に滌ぐ時に、成れる神の名は、上津綿上津見神。上を訓みてウヘと云ふ。次に上筒之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等の祖神と以ち伊都久神なり。伊より以下の三字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。故、阿曇連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫なり。宇都志の三字は音を以ゐよ。其の底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神なり。是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月讀命。次に御鼻を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。須佐の二字は音を以ゐよ。

右の件の八十禍津日神以下、速須佐之男命以前の十四柱の神は、御身を滌ぐに因りて生れるかみなり。

此の時伊邪那伎命、大く歡喜びて詔りたまひしく、「吾は子生み生みて、生み

（幸211頁と対読せよ）Date

付表　オホミマノハラヘ

御身之禊によりて成りませる十四神一覧

言霊の幸 66頁より

番号	神名	集合名	その内容
1	ヤソマガツヒノカミ 八十禍津日神	ワガレ 黄泉国の穢に因りて	カミナマガツビ 神と化りたる妖魔
2	オホマガツヒノカミ 大禍津日神	成りませる二柱。	
3	カムナホビノカミ 神直毘神	マガ 其の禍を直さんとして	
4	オホナホビノカミ 大直毘神	成りませる三柱。	〃
5	イヅノメノカミ 伊豆能売神		
6	ソコツワタツミノカミ 底津綿津見神		
8	ナカツ 中津　〃	三柱の綿津見神	イザナギノオホミカミ 伊邪那岐大御神の イブキ　サギリ 気吹の狭霧
10	ウハツ 上津　〃		
7	ソコツツノラノミコト 底筒之男命	スミノエ　オホカミ 墨江の三前の大神	〃
9	ナカツ 中　〃		
11	ウハツ 上　〃		
12	アマテラスオホミカミ 天照大御神	ミハシラノウヅノミコ 三貴子	上 尽天尽地の主としての
13	ツキヨミノミコト 月読命		伊邪那岐命 イザナギノミコト
14	タケハヤスサノラノミコト 建速須佐之男命		

「マ」の生滅起伏であるからには、その「カミ」の意志を無視して、人のみの意志の自由は成立しない。それ故此の問には、「マ」自体の意志で、それが則、「カミ」の意志で、〇の出没変転であると答へる。

第十五問、

先に箇体成立の活動状態を学んだのですが、崩壊滅尽の姿はいかがですか。

□答、

之レには、日本古典がそのまま良き答案である。先には、諸冊二神の「和合」に因って、天地万有一切合[illegible]が成立した・生産された。ところが「火神」をお生みになったために・「火神」の出現に依って、大悲劇が演[illegible]され、ヨモツヒラサカの一線を境として、天界と地底・顕界神域と幽界魔境・極楽と地獄・とが湧出した。古[illegible]記・書紀・等のアノ記述はマコトに精密であり確実である。その記述をそのまま簡単な形で書くならば、先づ火[illegible]が出現する。その神の姿は、私どもの見慣れたところで、〇〇（カヲ）と画く。それが、四象と呼ばれる箇体□□を焚滅ぼす。その状態は千態万様だが、いづれにしても、下向転落する。下向転落すると雖も、直線的ではない。上進展するにも、右旋左旋・左旋右旋・変転しつつ、完成せんとしたる如く、此の□□（箇体）は〇（火）上に在りて、ま[illegible]〇と化る。〇と化しつつも、水火交錯、幾変転、遂に「空なる〇（ナキモノ）」と成る。「成る」とは、「〇なる一（ナクアルモノ）」で[illegible]る。

此の「〇なる一（ナクアルモノ）」は、勿論、解体解脱の極で、「根之国・底之国之主」たる須佐之男大神である。

このスサノヲノオホカミに養ひ育てられて、大国主神は完成される。則、堅固大成の極で、「一なる〇（アリテナキモノ）」[illegible]る。古典は之レを、イザナギノオホミカミなる三（伊邪那岐大御神）ハシラノウヅノミコ（貴子）だと伝へ、成り成りて、成り成りたる〇（ヒ[illegible]

である。之ッは、向上の極と向下の極・極楽のハテと地獄のハテ・大の極と小の極・との一致点で、「〇の⊙」で、「⊙の〇」で、「如是神魔の体用」で、「本体現象不二不一」なのである。

ささかにの　くものいよりも　ほそければ　きづかざりけり　みちのあやいと。

と、人の嘆じたる、宇宙一貫の「真」である。

此くの如くに乖離分散して、その極に達したる時、忽然として、一点不滅の火なることを証し来るのである。

また是ッ〜なるなり。

第十六問、

「此の神業を、神代の神はミソギと教へて、神界現成の御行事なりと拝承す」と修禊の辞に教へられてありますが、よりよきものを生産する、よりよき世界を創造する、よりよき人物を育成する。即、これが神業で神代の神のミソギと教へ給ふ所で、マツリであると解釈してもよろしいでございませうか。

〔一〇〕

これで、思量の範囲に於ける一応の説明は出来たと云へる。

然り。

然れども、

這箇非思量底は奈何。

〔一一〕

一致点で、分岐点、境界線

○・――だとは、道反大神で、塞坐黄泉戸大神で、黄泉比良坂の一線で、二柱御祖神が、相互愛しき我が那勢命、愛しき我が那邇妹命」と愛でつつ、相逢ひ相別れたる○で、顕界神域と、幽界魔境と

一点であり、分岐点であり、境界線である。○は、また直に「如是」全宇宙で、⊕である。

此の⊕を「ハカ」と呼んで、生死を超越したる「イヘ」である。

「ハカ」の「ハ」は、「葉國」の「ハ」で、分れ出づる音義であり、その「カ」は、晃燿赫灼との音義だか

此の二音を合せては、光り輝く魂との義である。

かくて、幽界魔境もまた顕界神域に外ならず。此の故に、死者を斎ること、また、生者に仕へ、生者を斎

知くして、同殿惧床、日夜席を共にするのである。

天界地底在一几

る。之れを、

人の世では「聖」と呼ぶ。則、「カミ」である、我の内に拝む神であると共に、内外不二に拝みまつる「天皇」にてまします。

聖寿無窮。

之れは単なる讃へ辞でも祝ひ詞でも希望の詞と云ふのみでもない。まことに宇宙の事実で真理なのである。太古以来、その聖なる人類は此の事実を明らめ得て、此の真理の上に国を建てたので、それは「神聖国躰」であつた。

その国は穢れ無ければとて「土」と書き「穢土」と区別したのは注意深き支那文字の成立である。形に書けば○である。或は□とも描く。之れを日本語ではアマと呼ぶ。空なのである。「天」であり、「海」であり、「女」である。

「ア」は発き発いて、果て無く限りの無いのであり、「マ」は円満具足であるから、「アマ」とは大宇宙の義で都べてのものの産出者で、祖である。則、母胎で空界で零境である。之れを「イヘ」と呼ぶ。

此の○には不断起滅の火が有る。その火の燃ゆるを見て、○の中に一点を点ず。則、⊙である。「いへのあじ」で「光」である。「不断起滅の火」であるから即「一点不滅の火」である。

一点不滅の火は、則、無尽無量の水で、それがそのまま無際無涯の身であり、身も無く境地も無い心である。それは身でもなく水でもなく火でもなく心でもないところの⊙であるからとて、古老は、

一二三四五六七八九十と称へて、円満具足の箇躰だと讃美したのである。

六と七の数理